「子どものお手伝い」を考える

目次

Ⅰ「お手伝い調査」の枠組み　p 1

1「お手伝い調査」の趣旨

1）子どもの手伝いが必要だった時代　2）子どもの手伝いを必要としない時代

2「お手伝い調査」のデザイン

1）調査の枠組み　2）調査サンプル

3）調査ティームの持ち方

Ⅱ結果の概要　p 7

1子ども調査の主な結果

2母親調査の主な結果

3調査結果の示唆するもの

Ⅲ「お手伝い」子ども調査　p 11

1家族をめぐる状況　（p 11）

1）家族の構成　2）家族の居心地

2子どもの状況　（p 14）

1）家庭の中の子ども　2）子どもと学校

3）子どもの未来像　4）子どもの自己評価

3お手伝いをめぐって　（p 20）

1）手伝いの気持ち　2）手伝いの実態

3）手伝った方がよいか　4）手伝いへの評価

4　1984年調査との対比　（p 30）

1）子どもの手伝いの変化　2）手伝いと性差

3）家事の担い手

5「手伝う子」と「手伝わない子」　（p 37）

1）手伝いの尺度　2）手伝う子の家庭的な背景

3）手伝う子どもの気持ち　4）手伝う子と生活習慣

5）手伝う子の自己像

Ⅳ「お手伝い」母親調査　p 49

1母親としての心情　（p 49）

1）基本的な属性　2）家事についての気持ち

3）子どもとの関係

2「お手伝い」への気持ち　（p 60）

1）決まっているお手伝い　2）何を手伝っているか

3）手伝いへの気持ち

資料
子ども調査票
母親調査票
子ども調査の集計結果
母親調査の集計

「子どもの手伝い調査」調査メンバー

1　「子どもの行動学研究会」調査ティーム

代表　深谷昌志（東京成徳大教授・子ども社会学）
深谷和子（東京学芸大学名誉教授・児童臨床心理学）
石川達子（東京成徳大学講師）
三枝恵子（国学院大学講師）
滝淵寿　（東京都K区O小学校校長）
茅野一郎（東京都K区Y小学校校長）
谷野敏子（大阪府S市F小学校副校長）
上島博　（奈良県K市K小学校教諭）
木瀬達也（奈良県N市R小学校教諭）
中川貴三子（奈良県N市R小学校教諭）

2　花王（株）調査ティーム

石渡明美（生活者研究センター長）
平井淳子（ファブリック＆ホームケア研究室・室長）
小島みゆき（ファブリック＆ホームケア研究室）

（本報告書は深谷昌志が執筆した）

Ⅰ　お手伝い調査の枠組み

1　「お手伝い調査」の趣旨

1）子どもの手伝いが必要だった時代

昭和 16 年に教育研究同士会は子どもの生活について克明な調査研究を行っている。同書によれば、小学 5 年生が「毎日している」手伝い 7 は表 1 の通りである。男子より女子が、都市より農村の子どもが手伝っているが、農村の女子のほぼ 3 割は「雑巾がけ」や「部屋の掃除」などを手伝っている。それに対し、都市の男子でも、「庭掃除」や「食後の片付け」をしている子どもは 1 割に達する。

表 1　子どもの手伝い

	女　子			男　子		
	都市	農村	計	都市	農村	計
部屋の掃除	19.6	33.2	26.4	4.5	14.4	9.5
雑巾がけ	17.6	34.3	26.0	3.7	15.5	9.6
食後の片づけ	26.0	18.7	22.4	8.6	3.8	6.2
お使い	22.0	19.4	20.7	16.7	12.2	14.5
庭の掃除	17.6	18.3	18.0	9.9	20.6	15.3
水汲み	1.6	14.3	8.0	4.1	10.3	7.2
ご飯を炊く	2.0	12.1	7.1	1.8	3.1	2.5
7 項目の平均	15.2	21.5	18.4	7.0	11.4	9.2

「毎日手伝う」割合

教育研究同士会「児童の生活調査」昭和 17 年　34～5 ページ

同じ時期に生活時間を中心に子どもの生活を追いかけた牛島義友は、子どもの手伝いについて、表 2 のような数値を紹介している。地域差が見られるものの、子どもは平日で 1 時間半前後、休日になると 2 時間前後を手伝いに費やしている。

表 2　手伝いの時間

	農村	都市・下町	都市・山手
平日	1 時 31 分	1 時 27 分	49 分
休日	3 時 40 分	1 時 54 分	1 時 15 分

牛島義友　「農村児童の心理」　巌松堂書店、昭和 21 年　122～3 ページ

もちろん、この時代は家庭に電気が普及し、水道のある家庭も増えた。したがって、明治や大正時代のようにランプのホヤ磨きや薪木を集める、水汲みをするなどの子どもの手伝いは少なくなった。

それでも、家庭電化製品が普及する以前である。炊飯といっても、火をおこすことから始める作業だし、洗濯は洗濯板を使って、ごしごしと汚れをとり、水ですすぐ労働だった。子どもは家事を分担して担う貴重な戦力だった。子どもの手伝いが必要とされた時代である。

２）子どもの手伝いを必要としない時代

子どもが家事を担う必要がなくなったのはいつ頃からであろうか。ここでは、家事の文化史を辿るのが目的でないので、考察は簡略にとどめるが、昭和 50 年代の初めに、家庭生活は大きな変容をとげる。そのきっかけとなったのは、ファミレスやスーパー、コンビニの普及だった。

現在では、子どもも親とともに出入りするファミレスも、日本で最初のファミリーレストランのスカイラークが大阪万博内に開店したのは昭和 45 年だった。また、昭和 49 年には上大岡にデニーズ 1 号店が営業をはじめるが、昭和 55 年に 100 店舗、59 年に 200 店舗と、デニーズは全国的に展開されるようになる。ちなみに、マクドナルドの 1 号店が東京の銀座に開店に話題を集めたのは昭和 46 年だった。なお、昭和 49 年には東京の江東区でセブンイレブン、50 年に大阪の豊中にローソンが開店している。

ファミレスについては強烈な個人的な思い出がある。昭和 45 年、子どもたちに海外体験を積ませるプログラムの監修を頼まれてハワイに滞在した。子どもの対応に追われ、夕食を食べる機会を失い、夜の 11 時を回っていた。ホテルの外に「ココス」という看板が目にとまり、店内に足を踏み入れて驚いた。昼間のように明るい。夜中なのにハンバーグなどをリーズナブルの値段で食べるだけでなく、コーヒーは飲み放題だった。見たことのないサラダバーなるものがあった。それまでの東京では、八百屋や魚屋などは夜になると店を閉め、飲み屋や喫茶店などを除くと、8 時過ぎに開いている店はなかった。それなのに、ハワイでは、夜中にカジュアルな感じで食事をとれる。店を出る時に見た看板に 24 時間営業とあった。さすがアメリカという感じで、ホノルルに滞在中、朝に晩にココス通いをした。

このように、30 数年前の筆者には、ファミレスやスーパーはアメリカの香りのする文化だった。それから、4 半世紀を経て、現在では、ファミレスやスーパー、コンビニはどの町にもあり、ごく日常的な風景として日本の生活に定着している。

もちろん、それ以前にも三種の神器から３Ｃへ、時代を象徴する家庭電化の変化があった。その度に、家庭に新しい電化製品が入り、家事の省力化が進み、主婦の労力は劇的に軽減された。そうした状況に加え、ファミレスやスーパー、コンビニが加わった。そして、家食より外食の割合が増しただけでなく、家食にしてもレトルトなどのハーフメード材料を活用することが多くなった。衣生活についても、特別にこだわらなければ、リーズナブルな値段で着心地のよい衣類が簡単に手に入る状況になり、繕い物をする母の姿は消えた。

このように家事を構成する衣食住の中で、衣食を中心に家事の外部化が進み、母親は家

事から解放された。というより、家庭から家事作業が希薄になった。これまで、主婦は家事と育児を中心に担ってきたが、その内、家事労働が大きく軽減され、多くの女性が専業主婦の生き方を強いられる状況がなくなった。といっても、主婦の仕事から家事が減って、育児だけが残り、主婦の意識の中で、子育ての生活の比重が増している。

そうした状況が一部の教育ママを生む背景であろうが、本研究に即していうなら、子どもが母親のために手伝う必要はない時代を迎えている。というより、子どもの手伝いは家事の邪魔になりかねない。となると、子どもは家事をまったく手伝わなくてよいのか。先回りした問題提起をするなら、母親にとって子どもの手伝いは要らないが、子どものために家事を手伝わせる必要がある。現在はそうした時代なのかもしれない。しかし、そうした結論を出す前に、現在の手伝いがどうなっているのか。子どもと母親を対象に実施した手伝い調査を手がかりとして、現在の手伝いの意味を考えたいと思う。

2　本調査のデザイン

1　調査の枠組

1）調査の枠組み

本調査では、現在の子どもはどのようなお手伝いを行っているのか。そして、手伝うことは子どもの成長にどのような意味を持っているのかを明らかにしようとしている。調査の実施にあたって、以下の 3 点を配慮して、調査の枠組みを設定した。

①　子どもと母親を対象とした調査

お手伝いは家庭で行われる。手伝いをしているのは子どもだが、子どもの手伝いを支えているのは親たちであろう。そこで、調査デザインの設定にあたって、子ども調査と同時に保護者調査を実施し、手伝いについての親子の意識にずれがあるかなどを検討することにした。調査票の作成にあたり、親子に共通する項目を入れるなどを試みることにした。また、調査の実施にあたり、子ども調査を依頼した学校に、保護者調査をお願いすることにした。なお、保護者調査といっても、手伝いがテーマなので、調査票に母親の記入を求めるお願いの文章を付した。こうした形で、子どもと母親とを対象に調査を実施することにした。

②　時系列を追った比較調査

調査結果が得られた時、比較するデータがないと解釈をしにくい場合が少なくない。そうした場合、横断的に調査地域を広げ、地域差を検討する形でテーマに迫る方法もある。それと同時に、縦断的に時系列を追い、過去と現在を対比させ、現在の姿を探る。そうした比較する方法も有効である。しかし、この方法は過去に信頼できる調査が実施され、その調査票を活用できることが前提となる。

深谷昌志は子どもを対象とした調査を 40 年以上前から実施してきた。そうした中に小学生の手伝いについての調査がある。これは、1984 年に関西の小学 4 ～6 年生 1664 名を対象に実施したもので（1）どんな手伝いをしているか、（2）手伝いについての親からの期待、（3）手伝う子のイメージ、（4）手伝うのは子どもの仕事かなどの項目を含んでいる。

もちろん、1984 年調査のすべてを利用できるわけでなく、手伝いについても、試用した 20 項目の中から、「せんたくものをとりこむ」や「ハンカチなどにアイロンをかける」は現

在していない可能性が強いので、これを外し、残りの 18 項目を使用した。

「お手伝い一小学生ナウ　ＶOL4－5」（深谷昌志、東訓正、山田敏子、福武書店、1984 年 8 月刊）

③　手伝う子の自己像の分析

現在でも、手伝う子と手伝わない子とがいよう。そこで、手伝う子どもを支えているものは何かを明らかにしたいと考えた。そこで、（1）手伝いの背景を探るために、家庭の情況や子どもの日常生活に関する項目を加える。さらに、（2）手伝っている子と手伝っていない子との比較を行うために、子どもの自己像についての項目を調査票に盛り込むなどを行った。

2）調査サンプル

1984 年調査では、奈良や大阪の小学 4～6 年生を調査対象としていた。そこで、今回の調査でも、1984 年調査とほぼ同じ地域に同じ 4 ～6 年生の調査を依頼することにした。それと同時に、サンプルが関西に偏ることを避ける意味で、今回は東京でも調査を行うことにした。なお、念のため、関西と関東との調査結果を比較して、地域差が見られるかどうかの検討を行うことにした。また、前述したように、子ども調査を実施する学校に。母親調査を依頼することにした。

具体的には、関西（主として奈良や大阪）の 4 小学校と東京都下 K 区の 3 小学校、計 7 校に調査の実施を依頼した。調査は平成 23 年 2 月から 3 月に調査を実施した。

表　サンプルの構成　　（N）

		対象児童数	子ども調査	母親調査
A小学校	東京都 K 区	300	176	154
B小学校	東京都 K 区	240	250	218
C小学校	東京都 K 区	70	31	27
D小学校	大阪府 S 市	215	182	158
E 小学校	奈良県 N 市	235	137	120
F 小学校	奈良県 K 市	195	163	143
G 小学校	奈良県 N 市	111	75	66
計		1366	1014	886

3）調査ティームの持ち方

今回の研究は花王（株）「生活者研究センター」と「子どもの行動学研究会（代表・深谷昌志）」とのジョイント研究だった。そこで、「生活者研究センター」から平井淳子と小島みゆき、行動学研究会から深谷昌志の 3 人が定期的な会合を重ね、調査を進める形態をとった。具体的には深谷昌志が行動学研究会のメンバーと会合を持って、調査票の素案作成や調査サンプルの検討などを行い、3 人の会合に原案を提出する。平井淳子と小島みゆきは原案を研究所内に持ち帰り、研究所内の意向を 3 人の会に提出し、調整する形をとった。

その間、3 者間でメールを媒介とした意見交換を頻繁に行った。3 人は専門分野を異にしているため、当初は専門用語の調整から話し合いが必要だった。しかし、異分野の者が話し合ったことにより、結果として、質の高い調査を実施できたという感触を得ている。

Ⅱ結果の概要

１「子ども調査」の主な結果

１）家族をめぐる状況

1 一人っ子は 15.8%（表 2）
2 核家族が 79.1%（表 3）
3 父不在は 13.7%、母と同居が 97.1%（表 4）
4 フルタイムは 26.4%（表 5）
5 母親が「主に家事を担う」が 71.9%（表 6）
6 「食事がおいしく、仲がよく、幸せな家庭」（表 7 ）
7 家庭にいると「楽しい」が 79.6%（表 9）

２）子どもの状況

8 テレビ 3 時間視聴が 31.9%（表 11）
9 勉強時間が「30 分以下」が 31.0%（表 12）
10 将来に明るい見通し（表 17）
11 疲れやすい子が 57.3%（表 21）

３）手伝いをめぐって

12「手伝う」が「楽しい」が 66.9%（表 24）
○ 13 手伝い＝箸を並べ、食後、食器を運ぶ（表 27）
○ 14 男子の手伝いは女子の 84.3%（表 28）
15「手伝った方がよい」と思う（表 30）
16 手伝うと「思いやりのある人になれる」（表 34）

４）1984 年調査との対比

○ 17 今の子ども方が手伝っている（表 39）
○ 18 男子が手伝うようになった（表 40）
○ 19 今の子どもの方が手伝う気持ち（表 41）
○ 20 男子は手伝う気持ちが増した（表 42）
○ 21 母親中心の家事が 84 年の時代だった（表 43）

５）「手伝う子」と「手伝わない子」

22 一人っ子。2 世代家族の子は手伝わない（表 45.46）
○ 23 フルタイムの子は手伝う（差は少ない）（表 18）
○ 24 手伝う子は手伝うが、手伝わない子は全くしない（表 49）
25 手伝う子は手伝った方が良いと思っている（表 50）

○ 26 手伝う子は家が楽しく、家にコミットしている（表 53）
　27 手伝う子は家が楽しい（表 54）
○ 28 手伝う子はテレビ視聴時間が短く、家庭での勉強も長め（表 56.57）
　29 手伝う子は将来に明るい見通し（表 61）
○ 30 手伝う子は頑張るなどの自己像が明るい（表 62.63）

6）子ども調査のまとめ
①昔より手伝うようになったーー特に男子
②「手伝い」はきちんとした生活習慣の証し。
③「手伝う子」はきちんとしたよい子

2「母親調査」の主な結果

1）母親としての心情
1 母親の仕事＝フルタイム 20.8%、パート 40.0%、専業主婦 29.9%（表 2）
2 子どもの数＝一人っ子は 16.2%（表 4）
3 生き方＝パート 28.7%、専業 17.6%で、両立型は 17.8%（表 5）
4 家族の協力＝協力が得られるのはフルタイムと 2 世代家族（表 7）
5 好きな家事＝子ども＞洗濯＞料理＞掃除>夫 7（表 8）
6 子どもへの満足＝ほぼ満足（表 16）
7 手伝いへの満足＝満足は半々（表 17）
8 勉強と手伝い＝勉強が優位ではない（表 18）

2）お手伝いへの気持ち
○ 9 いつも手伝い＝「食器を運ぶ」と「風呂掃除」、専業主婦の家庭とフルタイムの家庭とで、手伝いの質が異なる（表 23）
10 子どもの手伝い＝「食器を運ぶ」と「箸を並べる」（表 25）
○11 手伝いの親子のずれ＝子どもが言うほど、手伝っていないと、母親は思う（表 26）
12 手伝いの属性＝フルタイムと核家族だが、差は少ない（表 27）
13 手伝って欲しい＝掃除（表 28）
14 手伝いの効用＝思いやりのある人（表 31）

3）母親調査のまとめ
①手伝いの種類が専業主婦とフルタイムとで異なる。
②母親の仕事の有無は予想したほどに子どもの手伝いに関連していない。

3　調査結果の示唆するもの
①現在の子どもは手伝っているのかーー「手伝いの真似事」だけ
深谷昌志は 40 年以上にわたって、子どもを対象とする調査を実施してきた。そうした中で、現在の子どもは手伝いらしいことをほとんどしていないという感触を得ていた。そして、実際に今回の調査結果でも、子どもがよくしている手伝いは、「①食後、食器を運ぶ」

と「②茶碗や箸を並べる」（母親調査・表 26）に限られていた。「食器を運ぶ」のは自分の食器であろうし、「茶碗や箸を並べる」は食事の前にちょっと参加した程度である。なお、表 26 によれば、手伝う項目の 3 位は「③ご飯をよそう」、4 位は「④テーブルを拭く」で、こうした回答は母親と子どもとで一致している。

家事の省力化が進んでいるといっても、「床を拭く」とか「夕食作りを手伝う」、「風呂場を洗う」、「洗濯物をしまう」など、子どもでも手伝えることがあろう。しかし、現在の子どものしている手伝いに「手伝いの真似事」という印象を受ける。

②子どもの手伝いは減ったのか――男の子が手伝うようになった

1984 年調査との比較を考えた時、子どもの手伝いは減っていると予想していた。それだけに、現在の子どもの方が手伝っているという調査結果（子ども調査・表 39）に驚いた。もっとも、さらに考察（子ども調査・表 40）を進めると、1984 年より、女子の手伝いは減ったが、手伝う男子が増えた。そして、手伝う男子の増加が女子の減少を上回ったというのが、手伝いの微増の背景だった。

1984 年当時、ほとんどの家事の担い手は母親だった（子ども調査・表 43）。性的な役割分業が家庭の中に定着していた時代である。しかし、4 半世紀の間に、家族を取り巻く情景が変り、現在では、多くの父親が家事に加わるようになった。そうした父親の姿を見て、男子も家事に参加し始めたのであろう。そうした変化がうかがえて興味深い意調査結果だが、シニカルないい方をするなら、男の子も「手伝いの真似事」をするようになった。しかし、性的な役割分業意識が弱まった分だけ、女子の手伝いが減っっているのは,女子のために良かったといえるのか疑問が残る。

③「手伝う子ども」と「手伝わない子ども」――「手伝う子ども」は子どもらしい良い子

本調査に取り組むにあたって、花王サイドのスタッフから「手伝う子ども」と「手伝わない子ども」との差を明らかにして欲しいという強い要請があった。これまで、深谷昌志は学業成績やテレビ視聴、テレビゲームなどについて自己像との関連を考察してきた。しかし、手伝いに着目して、考察を試みる経験はなかった。正直にいって、手伝うかどうかが子どもの自我像と密接に関連するとは思えなかった。

しかし、調査結果によると、手伝う子どもと手伝わない子との間に大きな開きが見られた。「手伝う子ども」は、テレビ視聴時間が短く、しっかり勉強時間している子ども（子ども調査・表 56.57）だった。それと同時に、「友だちが多く、頑張る」（子ども調査・表 62.63）という明るい自己像を抱く子どもであった。

端的にいうなら、「手伝う子ども」は生活習慣がしっかりとし、自分に自信を持ち、将来に明るさを感じている「子どもらしい良い子ども」である。もちろん、子どもと自己像との関係は、手伝っていると子どもがよくなるのでなく、生活習慣のしっかりとした子どもが手伝っているのであろうが、手伝いが子どもの自己像を支えている子とは否定できないように思えた。

④手伝う子どもの背景――安定した家族の中での手伝い

さらに、手伝う子どもは自分の家庭を居心地が良い（子ども調査・表 53）と答えている。詳しくは本報告の本文を読んで欲しいが、手伝いは子ども個人というより、子どもの背景に安定した家庭があるのを感じる。安定した家庭の中で、親に支えられ、そうした雰囲気に囲まれて家事を手伝っている子どもの姿を感じる。多くの親はしつけとして子どもに家

事を手伝わせ、よく手伝うと褒め、手伝わない時は手伝うようにいう。そうしたしつけが手伝う子どもを育てるのであろう。

⑤手伝いはした方がよいか――手伝いはした方がよいと思う

調査にあたって、子どもは手伝いなどしなくて良いと思っているのでは考えた。少なくとも、そう感じている子どもが一定数はいるだろうと予想していた。しかし、本調査で使用した 18 の項目のすべてについて 6 割の子どもは「手伝った方がよい」と答えている。8 割以上の子どもが「手伝った方がよい」と思う項目は 9 項目に達する。そうした意味では、多くの子どもは手伝いをした方がよいと思っていることはたしかであろう。

⑥手伝いの意味するもの――「手伝い」は家庭教育を示すバロメーター

これまでふれてきたように、手伝う子どもは生活習慣がしっかりした明るい自己像を持つ子どもだった。それと同時に、手伝う子どもが家庭の安定さに支えられていることも顕著だった。そうした意味では、「手伝い」は家庭が充実し安定しているかを示すバロメーターの意味を果たしている。端的ないい方をするなら、子どもの手伝いはその家庭のしつけがうまくいっているかどうかを反映している。換言するなら、子どもがきちんと手伝っているなら、その家庭のしつけはうまくいっているといえよう。

⑦手伝いの現在的な意味――家庭教育のシンボル

親の立場からすると、子どもに手伝ってもらう必要はないかもしれない。しかし、子どもはいずれ家庭を持つことになる。そうした時、家事についての力を持っていないと家庭の切り盛りが大変になる。

そうした意味では、子どもの将来のために、きちんと家事を手伝わせるのが親の使命であろう。それと同時に、家庭は親だけでなく、みんなで支えていくものという感覚を子どもに持たせることも親の役割であろう。「たかが手伝い」ということも可能だが、「されど手伝い」で、本調査は手伝いが子どもの自画像の中核を支えることを明らかにした。それだけに、親はもう少し自信を持って子どもを手伝わせて欲しいと思った。

「手伝う子ども」は子どもらしいきちんとした子

子どもの「手伝い」は家庭教育のシンボル

Ⅲ　「お手伝い」子ども調査

子ども調査のサンプルは以下の通りである。

表１　サンプル構成　　（%）

		男子	女子	計
総　数	（N）	532	482	1014
学　年	4 年	52.9	47.1	416
	5 年	51.4	48.6	335
	6 年	53.0	47.0	407
地　域	関東	54.0	46.0	528
	関西	51.3	48.7	664

Ⅰ　家族をめぐる状況

1）家族の構成

手伝いをする場は家庭である。そこで、手伝いの調査結果にふれる前に、本調査のサンプルとなった子どもの家庭環境を紹介することにしよう。

まず、きょうだいの数では、一人っ子は 15.8%で、84.2%がきょうだいのいる環境である（表２）。また、祖父母などと同居している家族は 20.9%で、ほぼ 8 割が核家族である。したがって、本サンプルは「核家族で子どもが 2 人」という標準的な家庭が多いという印象を受ける。

なお、家族の構成は表 4 の通りだが、さすがに、97.1%の子どもは母親が家庭にいる状態で、母親不在は 2.9%にすぎない。しかし、父親は「いる」が 86.3%であるから、不在は 16.7%とほぼ 2 割に近い。学校を訪ねると、母子家庭が増えたと聞くことが多いが、表 4 の結果でも、40 人学級で 5.5 人が父のいない母子家庭であることを示唆している。

表２　一人っ子――一人っ子は 2 割弱――　　（%）

	全体	性　別		学　年		
		男子	女子	4 年	5 年	6 年
一人っ子	15.8	17.3	14.2	17.3	17.5	12.9
2 人以上	84.2	82.7	85.8	82.7	82.5	87.1

表 3　家族の型――核家族が 8 割――　　（%）

	全体	性　別		学　年		
		男子	女子	4 年	5 年	6 年
核家族	79.1	79.7	78.9	79.3	80.5	77.9
2 世代家族	20.9	20.3	21.1	20.7	19.5	22.1

表４　家族のメンバー×属性――父不在は 17%、祖母が 2 割――　　(%)

		母	父	弟	兄	妹	姉	祖母	祖父	その他
全　体		97.1	86.3	28.8	26.8	24.9	24.5	17.9	11.7	3.8
性別	男子	96.8	87.2	29.5	28.2	21.6	24.8	17.3	10.4	3.7
	女子	97.2	84.8	27.9	25.0	28.7	24.2	18.3	12.8	4.1
学年	４年	97.3	85.5	29.2	25.5	23.4	22.2	18.3	11.3	2.1
	５年	97.3	83.5	28.4	25.4	27.2	24.2	16.5	10.5	5.0
	６年	96.9	89.1	29.0	29.3	24.6	27.0	18.6	12.7	4.4
地域	関東	94.5	86.0	26.4	25.1	24.5	23.9	17.0	10.7	3.3
	関西	97.5	86.5	30.7	28.2	25.2	24.9	18.6	12.4	6.1

母親の仕事の有無は表 5 の通りで、フルタイムが 26.4%で、専業主婦 27.8%、パートタイム 25.3%である。女性を対象とした意識調査を行うと、パートや家業手伝いは専業主婦の意識と共通する面が多い。そうしたデータを配慮すると、フルタイムの母親が 4 分の 1 で、専業主婦的な女性が 4 分の 3 に達する感じになる。

表 5　母の仕事×属性――フルタイムは 4 分の 1――　　(%)

		専業主婦	パート	フルタイム	家業手伝い	その他
全　体		27.8	25.3	26.4	5.1	15.4
性　別	男　子	27.3	25.9	26.1	5.5	15.2
	女　子	28.9	24.3	26.8	4.2	15.8
学　年	4　年	29.8	26.7	24.9	5.1	13.5
	5　年	28.4	20.2	29.0	6.6	15.8
	6　年	25.7	27.9	25.7	3.7	17.0
地　域	関　東	25.7	21.6	31.8	6.8	14.1
	関　西	29.5	28.4	21.9	3.7	16.5

子どもの手伝いは母親の家事分担と関連する。そこで、家事を誰が担っていたのかを調べると、表 6 の通りである。表中の「①トイレ掃除」から「⑤みんなの部屋の掃除」までを平均した表中の下欄が示すように、家事の 71.9%を母親が担っている。父親の家事参加などが紹介されることが多いが、この結果によると、予想される以上に、母親が家事の中心になっているのが分る。

もちろん、母親がフルタイムで働いているか、それとも、専業主婦かで家事の意味が変ってくるが、この問題は親調査の中で詳しく検討することにしたい。

表６　母親の家事分担――――母親が７割（%）　　（%）

	全部母親	主に母親	母小計	母親半々	主に他の人	全部他の人
①朝食を作る	48.9	34.4	83.3	6.4	5.1	5.2
②トイレ掃除	50.9	22.5	73.4	10.7	6.8	9.1
③洗濯	48.7	29.3	78.0	12.3	5.0	4.7
④夕食を作る	43.78	38.9	82.7	8.8	4.4	4.0
⑤みんなの部屋の掃除	28.4	35.5	63.9	20.8	7.3	8.0
⑥お風呂の掃除	21.1	28.9	50.1	20.1	13.8	15.9
６項目の平均	40.3	31.6	71.9	13.2	7.1	7.8

２）家族の居心地

表７は「家庭の雰囲気」についての結果だが、「食事がおいしく、仲がよく、みんなが幸せ」が８割に達する。表８の属性分析でも、属性を超えて、「みんなが幸せ」の家庭が８割前後に達する。家族の崩壊が報じられることが多い。しかし、実際には、多くの子どもにとって、家庭は精神的に安定できる場なのであろう。

表７　家庭の雰囲気――「食事がおいしく、仲がよく、幸せ」が８割――　（%）

	とても	わりと	（小計）	少し	あまり	全く
①食事がおいしい	72.8	22.4	95.2	3.8	0.7	0.3
②親類と仲良く	53.5	25.1	78.6	13.1	5.0	3.3
③みんなが幸せ	52.1	28.1	80.2	12.8	6.2	0.8
④家族の仲がよい	51.9	31.2	83.1	11.0	4.7	1.2
⑤みんなで助け合って	31.6	36.9	68.5	20.5	9.3	1.6
⑥経済的に豊か	30.1	36.2	66.3	21.5	9.8	2.4
⑦近所の人と仲良く	26.9	28.1	55.0	22.4	15.1	7.5
⑧みんなで家の仕事	25.9	27.8	53.7	25.9	15.7	4.7
⑨夕ご飯を食べに行く	16.5	22.2	38.7	32.0	25.8	3.5

表８　家族のみんなが幸せ×属性　　（%）

		とても	わりと	（小計）	少し	あまり	全く
全　体		52.1	28.1	80.2	12.8	6.2	0.8
性　別	男　子	53.3	27.2	80.5	12.1	6.7	0.7
	女　子	50.9	29.1	80.0	13.2	5.8	1.0
学　年	４　年	58.3	25.6	83.9	10.3	4.5	1.3
	５　年	46.6	31.1	77.7	14.4	7.2	0.7
	６　年	49.9	28.6	78.5	13.9	7.1	0.5

地　域	関　東	46.7	33.0	79.7	13.8	6.0	0.4
	関　西	56.1	24.4	80.5	12.0	6.4	1.1

子どもたちにとって家庭の居心地はどうなっているのか。表 9 に示したように、「①のんびりする」が 80.0%、「②家にいると楽しい」が 79.6%である。そして、「③家にいるとイライラ」が 14.5%、「④家で緊張する」子どもが 1.8%で、多くの子どもが「家の居心地がよい」と答えている。なお、「②家にいると楽しい」の詳しい属性別のデータを表 10 に掲げた。

表 9　家庭での居心地――「居心地がよい」が約 8 割――　　(%)

	とても	わりと	(小計)	少し	あまり	全く
①のんびりする	58.0	22.0	80.0	12.0	5.3	2.7
②家にいると楽しい	54.3	25.3	79.6	14.1	3.4	2.9
③家にいるとイライラ	5.9	8.6	14.5	16.9	29.8	38.8
④家で緊張する	1.0	0.8	1.8	3.7	12.8	81.7

表 10　家にいると楽しい×属性――小 4＞小 5＞小 6――　　(%)

		とても	わりと	小計	少し	あまり	全く
全　体		54.3	25.3	79.6	14.1	3.4	2.9
性　別	男　子	56.1	23.6	79.7	13.2	3.4	3.7
	女　子	52.4	26.9	79.3	15.2	3.5	2.0
学　年	4　年	64.2	19.1	83.3	9.9	2.9	3.9
	5　年	53.0	28.8	81.8	12.2	3.6	2.4
	6　年	45.1	29.0	74.1	19.8	3.8	2.3
地　域	関　東	50.3	26.4	76.7	17.4	3.4	2.5
	関　西	57.8	24.4	82.2	11.3	3.3	3.2

このように見てくると、子どもの家庭環境は、核家族できょうだいは 2 人、働きものの母親がいて、家庭の居心地がよいという感じになる。

2　子どもの状況

1）家庭の中の子ども

それでは、子どもたちは家庭の中でどんな暮らしを送っているのか。まず、テレビ視聴の時間は「3 時間以上」が 31.9%で、これに、「2,5 時間」の 9.4%を加えると、4 割の子どもがテレビを長時間視聴している（表 11）。また、家庭での勉強時間は「30 分以下」が 31.0%で、これに、「1 時間」の 29.1%を加えると。6 割の子どもの勉強時間が 1 時間以下という計算になる（表 12）。

表 11　テレビ視聴時間×属性――3 時間以上が 3 割――　　（%）

		30分以下	1時間	1.5 時間	2時間	2.5 時間	3 時間以上
全　体		10.2	15.6	14.4	18.5	9.4	31.9
性　別	男　子	9.5	16.6	13.8	20.0	8.7	31.4
	女　子	11.5	14.1	14.8	16.1	10.6	32.9
学　年	4　年	11.1	20.0	15.0	18.1	6.3	29.5
	5　年	11.1	15.6	14.7	17.7	8.4	32.5
	6　年	8.7	10.9	13.4	19.6	13.6	33.8
地　域	関　東	10.0	16.3	16.9	18.6	9.6	28.6
	関　西	10.4	15.0	12.3	18.5	9.3	34.5

表 12　勉強時間×属性――「30 分以下」が 3 割――　　（%）

		30分以下	1時間	1.5 時間	2時間	2.5 時間	3 時間以上
全　体		31.0	29.1	15.8	9.2	5.4	9.5
性　別	男　子	34.0	27.8	14.7	8.9	4.7	9.9
	女　子	28.1	30.2	16.9	9.6	6.1	9.1
学　年	4　年	29.0	31.2	15.5	10.9	4.4	9.0
	5　年	33.6	24.2	17.3	9.0	5.4	10.5
	6　年	31.2	30.9	14.6	7.7	6.4	9.2
地　域	関　東	32.2	28.9	14.3	8.8	5.9	9.9
	関　西	30.1	29.2	17.1	9.5	4.9	9.2

「家庭で勉強をしないで、テレビばかり見ている」状況は、本調査に限らず、子どもを対象にした多くの調査でも見られる傾向である。例えば、日本子ども社会学会が実施した子どもの放課後調査では、テレビを「3 時間以上見ている」子は 26.1%（本調査は 31.8%）、家庭学習が「30 分以下」の子は 31.7%（本調査は 31.0%）で、今回の調査結果の数値とほぼ一致した傾向を示している（深谷昌志他「いま、子どもの放課後はどうなっているのか」北大路書房、2006 年）。

2）子どもと学校

それでは、子どもはどんな気持ちで学校へ通っているのか。「学校の楽しさ」について、「とても」の 42.5%に、「わりと」の 31.0%を加えると、73.5%が「学校へ行くのが楽しみ」と答えている（表 13）。他の調査でも、学校が楽しみと答え手いる結果を目にすることが多い。授業が楽しいというのでなく、友だちがいる学校へ行くのが楽しみというのであろう。

表 13　学校の楽しさーー「とても楽しい」が 4 割――　　（%）

		とても	わりと	少し	あまり	全然
全　体		42.5	31.0	16.7	6.8	3.0
性　別	男　子	40.9	30.5	17.3	7.9	3.4
	女　子	44.5	31.2	16.2	5.7	2.4
学　年	4　年	50.3	29.9	12.5	5.1	2.2
	5　年	43.1	26.6	19.8	8.1	2.4
	6　年	33.8	35.9	18.5	7.4	4.4
地　域	関　東	39.0	32.9	18.4	7.4	2.3
	関　西	45.5	29.4	15.2	6.3	3.6

子どもは授業を受けるために学校へ通っている。授業の中でも、国語と算数が重要になるが、両教科の理解度は表 14.15 の通りである。いずれも、「大体」を含めて、「分る」子どもが 7 割を超えている。多くの子どもは勉強が分かるし、学校が楽しいと答えている。

表 14　授業の理解（国語）　　（%）

		殆んど	大体	半分	あまり	全然
全　体		30.6	43.8	20.0	3.5	2.1
性　別	男　子	29.5	43.7	20.8	3.2	2.8
	女　子	32.1	43.9	18.8	3.9	1.3
学　年	4　年	35.1	42.6	17.5	2.2	2.6
	5　年	30.9	43.6	20.1	3.3	2.1
	6　年	25.4	45.4	22.5	5.2	1.5

表 15　授業の理解（算数）　　（%）

		殆んど	大体	半分	あまり	全然
全　体		35.3	37.0	16.3	8.2	3.2
性　別	男　子	39.7	38.8	14.0	4.4	3.1
	女　子	30.8	34.6	18.6	12.6	3.4
学　年	4　年	42.0	36.2	13.3	5.6	2.9
	5　年	30.7	39.9	16.7	9.3	3.4
	6　年	31.8	35.9	19.0	10.0	3.3

なお、学歴期待の結果は表 16 の通りで、難関大学の 17.5%を含めて、大学進学希望率は 45.2%である。なお、2009 年に、深谷昌志が実施した調査（「子ども基本調査」6 大学連携教育人材育成事業、東京成徳大学子ども学部、平成 22 年 3 月）によれば、台東区では難関大学の 19.9%を含めて大学進学期待は 41.9%だった。ちなみに、同じ調査で軽井沢町の数値は 38.2%（難関大 21.5%）だった。したがって、本調査の結果は現在の都市に住む子ど

もの平均的な姿を示しているように思われる。

表 16　学歴希望　　(%)

		中学	高校	専門	大学	難関大
全　体		4.9	21.0	28.9	27.7	17.5
性　別	男　子	4.5	24.6	17.5	31.0	22.4
	女　子	5.6	17.0	41.1	24.1	12.2
学　年	4　年	7.0	21.8	26.4	25.7	19.1
	5　年	5.1	25.0	31.0	24.4	14.5
	6　年	2.7	17.2	29.4	32.5	18.2

3）子どもの未来像

子どもの抱く将来の見通しは表１７の通りで、「⑥社会的に有名になれる」や「お金持ちになれる」は無理かもしれない。しかし、「④つきたい仕事につける」や「④幸せな家庭を作る」は可能だろうと、全体として将来に明るい見通しを抱いている。なお、表 18 によれば、７項目を平均した場合、男子の 61.0%と比べ、女子は 66.1%で、女子の方が将来に明るい見通しを抱いているのが分る。

表 17　　将来への見通しーーそれなりに明るい見通し　　(%)

	きっと	多分	（可能）	多分	絶対
①好きな人と結婚できる	12.2	41.0	53.2	35.3	11.5
②良い父・母になれる	27.3	50.4	77.6	17.6	4.7
④幸せな家庭を作る	37.3	46.1	83.4	13.2	3.4
④つきたい仕事につける	33.8	47.5	81.2	17.1	1.6
⑤仕事面で成功する	23.1	52.7	75.8	20.8	3.4
⑥社会的に有名になれる	9.1	23.8	32.9	45.6	21.5
⑦お金持ちになれる	12.7	26.7	39.4	41.2	19.4

表 18　　将来への見通し×属性ー女子の方が明るい見通し　(%)

	性　別		学　年		
	男子	女子	4 年	5 年	6 年
①好きな人と結婚できる	43.4	63.5	50.6	52.0	56.6
②良い父・母になれる	72.9	83.1	81.1	77.4	74.4
③幸せな家庭を作る	78.5	88.7	87.0	81.6	81.3
④つきたい仕事につける	80.1	83.4	85.0	79.1	79.1
⑤仕事面で成功する	74.3	77.6	81.2	70.6	74.5
⑥社会的に有名になれる	34.6	31.3	35.9	26.0	35.2

⑦お金持ちになれる	43.4	35.2	44.3	34.9	38.1
7項目の平均	61.0	66.1	66.4	60.2	62.7

「きっと」+「多分」可能と思う割合

4）子どもの自己像

表19は子どもの自己評価を示している。多くの子どもは「友が多く、頑張るタイプ」だと自分を思っている。しかし、学年別に見ると、4年生から6年生へ、学年が上がるにつれて、自己評価が低下している（表20）。

表19　子どもの自己評価――友が多く、頑張るタイプーー　（%）

	とても	わりと	そう割合	あまり	全然
①友だちが多い	35.5	43.6	79.1	17.3	3.6
②頑張る	27.4	38.0	65.4	27.1	7.5
③優しい	21.9	37.6	59.5	30.7	9.8
④スポーツが得意	21.4	33.5	54.9	31.6	13.5
⑤正直	13.5	38.2	51.7	38.2	10.3
⑥勇気がある	17.9	31.0	48.9	41.3	9.8
⑦勉強が得意	13.8	33.5	47.3	37.3	15.4

表20　子どもの自己評価×属性――小4>小6――　（%）

	性別		学年		
	男子	女子	4年	5年	6年
①友だちが多い	79.0	81.7	86.4	75.0	74.8
②頑張る	65.4	66.9	74.9	58.7	61.0
③優しい	59.3	60.2	69.0	54.8	61.5
④スポーツが得意	61.2	48.0	62.2	54.5	46.9
⑤正直	51.6	52.2	49.8	46.2	47.5
⑥勇気がある	47.5	50.1	49.9	45.0	40.4
⑦勉強が得意	50.1	43.9	53.4	45.4	42.3

表２１に子どもの精神的な安定さを示した。「疲れやすい」子どもが「わりと」を含めると57.3%と6割に迫る。「イライラする子」も45.1%である。

これまでふれたように、子どもたちはのんびりとテレビを見たり、ゲームをしたりする放課後を過している。したがって、疲れることはないだろうと思うのだが、子どもは疲れを訴えている。先に紹介した調査（「子ども基本調査」6 大学連携教育人材育成事業、東京成徳大学子ども学部、平成22年3月）でも、「疲れやすい」子は台東区では56.6%、軽井沢町でも 49.8%である。そうした意味では、つかれやすい子どもが蔓延している印象を受ける。

表 21　　精神的な不安定さーー疲れやすい子が多いーー　　（%）

	とても	わりと	小計	あまり	全然
①疲れやすい	23.7	33.6	57.3	30.0	12.7
②イライラする	20.2	24.9	45.1	34.7	20.2
③体がだるい	17.8	25.2	43.0	38.4	18.6
④朝、お腹がすかない	16.4	15.2	31.6	26.3	42.1

表 22　精神的な不安定さ×属性――男子＜女子、小 4＜小 6――　　（%）

	性　別		学　年		
	男子	女子	4 年	5 年	6 年
①疲れやすい	53.1	61.6	52.6	58.1	61.5
②イライラする	40.3	50.6	36.7	49.6	50.2
③体がだるい	41.2	44.6	38.2	44.4	46.8
④朝、お腹がすかない	29.6	33.6	35.6	29.0	29.9

いずれにせよ、子どもにとって家庭は居心地の良い場で、学校もそれなりに楽しい。そして、将来について楽観的な見通しを抱いている。そうした安定感のせいか、子どもたちはあまり勉強をせず、のんびりテレビなどを見て家庭でくつろいでいる。それにしては、疲れているという感じはどうして出てくるのであろうか。

３　お手伝いをめぐって

１）手伝いの気持ち

手伝いをする子どもが減ったといわれる。家庭の電化が進み、家事仕事そのものが減っている。加えて、核家族が増え、家族のサイズも小さくなった。それだけに子どもの手伝いを必要としない状況が進んでいる。かつての手伝いは母親が子どもの手伝いを必要としていた。それに対し、母親は手伝いを必要としていないが、子どものために手伝わせるのが現在の手伝いであろう。

それでは、子どもは手伝いをどう感じているのか。表 23 のように「手伝いを好き」な子どもは、「とても」の 13.8%に「わりと」の 47.4%を加えて、61.2%である。なお、属性別では、男子より女子の方が家事が好きで、６年生より４年生の方が家事が好きという傾向が得られている。また、手伝う時の気持ちは「とても」の 18.7%に「わりと」の 48.3%を加えて、「楽しい」が 67.0%で、「楽しくない」が 3 分の 1 である（表 24)。また、「自分から手伝うか」、それとも、「親にいわれて」かを尋ねると、答えはほぼ半々だった（表 25)。

手伝いの好きな子どもがいることもたしかだが、当然といえば当然だが、手伝いに乗り気でない子どもが少なくない印象を受ける。特に学年があがるにつれて、手伝いに消極的な子どもが増加しているのが気になる。

表 23　手伝いの好き嫌い

――好きは 6 割。女子＞男子、4 年＞6 年――　　（%）

		とても好き	わりと好き	好き小計	あまり好きでない	とても嫌い
全　体		13.8	47.4	61.2	33.7	5.1
性　別	男　子	7.6	44.2	51.8	41.3	6.9
	女　子	20.8	50.6	71.3	25.4	3.3
学　年	4　年	20.1	47.9	68.0	27.4	3.3
	5　年	12.9	49.6	62.4	31.2	6.3
	6　年	8.2	44.6	52.8	42.4	4.7
地　域	関　東	11.5	49.8	61.3	34.9	3.8
	関　西	15.8	45.4	61.2	32.6	6.2
子ども	１人子	12.0	45.9	57.9	36.6	5.5
	２人	14.2	47.6	61.8	33.3	4.9
家族	核家族	13.8	46.4	60.3	34.7	5.1
	２世代	13.3	51.4	64.8	30.3	5.0

表 24　手伝う気持ち

――楽しい 3 分の 2、女子＞男子、小 4＞小 6――　　（%）

		とても楽しい	わりと楽しい	楽しい・小計	あまり	全然
全　体		18.7	48.2	66.9	26.3	6.8
性　別	男　子	13.1	47.2	60.3	31.2	8.5
	女　子	25.3	48.4	73.7	21.3	5.0
学　年	4　年	28.0	50.0	78.0	18.1	3.9
	5　年	18.9	47.0	65.9	25.7	8.4
	6　年	8.9	47.3	56.2	35.4	8.4
地　域	関　東	16.0	51.1	67.1	26.6	6.3
	関　西	20.9	45.9	66.8	25.9	7.3

表 25　自分から手伝うのか

――やや消極的、女子＞男子、4 年＞6 年が自発的――　（%）

		自分から	大体、自分	自分・小計	大体・親から	親に云われて
全　体		11.6	37.9	49.5	42.8	7.7
性　別	男　子	7.6	36.9	44.5	46.4	9.1
	女　子	15.9	38.6	54.5	39.0	6.5
学　年	4　年	16.0	40.4	56.4	35.6	8.0
	5　年	11.4	38.1	49.5	43.0	7.5
	6　年	7.4	34.9	42.3	50.0	7.7
地　域	関　東	9.7	37.8	47.5	45.3	7.2
	関　西	13.2	38.0	51.2	40.7	8.1

2）手伝いの実態

それでは、実際に子どもはどんな手伝いをしているのか。表 27 に示したように、「週に 3 日以上している」のを「手伝っている」ととらえるなら、子どもが手伝っているのは、「①食後、食器を運ぶ（81.3%）」、「②茶碗や箸を並べる（68.4%）」の 2 種である。もっとも、「食器を運ぶ」や「端を並べる」を手伝いといってよいかも疑問だが、これに、手伝いの対象を 5 割まで広げるなら、「③ご飯をよそう（58.7%）」、「④テーブルを拭く（52.6%）」が加わる。そして、「⑭食器を洗う（20.7%）」や「⑯食器を拭く（16.9%）」、「⑰洗濯物を干す（16.5%）」などの手伝いらしいことをしている子どもは 2 割以下にとどまる。

表 27　子どもの手伝い――箸を並べ、食後に食器を運ぶ――　　（%）

	毎日	週 3	小計	週 1	月 2	1.2 回	0 回
①食後、食器を運ぶ	68.0	13.3	81.3	6.1	6.3	4.5	1.8

②茶碗や箸を並べる	46.7	21.7	68.4	13.1	10.2	6.5	1.8
③ご飯をよそう	33.8	24.9	58.7	14.7	15.0	7.1	4.5
④テーブルを拭く	30.9	21.7	52.6	16.2	16.4	10.3	4.5
⑤洗濯物をしまう	20.5	17.0	37.5	14.0	21.4	14.8	12.3
⑥玄関の靴を揃える	19.9	16.8	36.7	19.4	20.2	14.9	8.8
⑦自分の机回りの掃除	19.3	15.3	34.6	18.1	27.8	10.9	8.6
⑧洗濯物をたたむ	13.7	17.1	30.8	17.4	28.2	18.0	5.6
⑨お風呂の掃除	14.7	15.0	29.7	14.2	21.9	19.6	14.6
⑩ごみを出す	11.2	14.0	25.2	16.8	24.6	18.8	14.6
⑪朝、新聞を取る	11.3	10.7	22.0	14.4	17.7	17.6	28.5
⑫みんなの部屋の掃除	9.9	11.9	21.8	20.4	27.2	20.8	9.8
⑬簡単な料理を作る	9.7	11.9	21.6	16.7	27.2	22.0	12.5
⑭食器を洗う	7.8	12.9	20.7	16.1	31.2	22.0	10.0
⑮近所に回覧板を回す	9.5	8.1	17.6	11.5	17.5	15.7	37.7
⑯食器を拭く	7.7	9.2	16.9	12.2	25.3	21.6	24.0
⑰洗濯物を干す	6.3	10.2	16.5	12.7	27.1	24.6	19.1
⑱トイレ掃除	3.3	5.0	8.3	7.9	16.7	21.5	45.6

子どもの手伝いと性差との関連を考えると、手伝いをするのは主に女子で、男子の手伝いは少ないような印象を受ける。たしかに、表 28 に示したように、手伝いの 18 項目の内、女子の数値が男子より多いのが 16 項目で、男子が女子を上回るのは、「⑩ごみを出す」と「⑪朝、新聞を取る」の 2 項目にすぎない。そうした意味では、依然として、女子がより多く手伝っているのはたしかだが、表中の下欄に示すように、女子の手伝う 18 項目の平均は 36.3%で、男子は 30.6%である。その差は 5.7%に過ぎない。したがって、男女の差はそれ程大きくなく、男子もけっこう手伝っている印象を受ける。

表 28　子どもの手伝い×性差

——男子は女子のほぼ 8 割。料理=女子、新聞取り＝男子——　　(%)

	男　子			女　子			差	割合
	毎日	週 3	小計	毎日	週 3	小計		
①食後食器を運ぶ	65.0	14.1	79.1	72.0	11.9	83.9	4.8	94.2
②茶碗や箸並べる	44.9	20.8	65.7	48.4	23.3	71.7	6.0	91.6
③ご飯をよそう	32.0	21.7	53.7	35.9	28.1	64.0	10.3	83.9
④テーブルを拭く	26.0	20.1	46.1	35.8	24.1	59.9	13.8	77.0
⑤洗濯物をしまう	18.1	17.4	35.5	23.1	16.6	39.7	4.2	89.4
⑥玄関の靴を揃え	15.1	17.0	32.1	25.2	16.8	42.0	9.9	76.4
⑦自分の机回り	14.1	14.7	28.8	25.0	15.9	40.9	12.1	70.4
⑧洗濯物をたたむ	12.4	15.3	27.7	15.2	18.9	34.1	6.4	81.2

⑨お風呂の掃除	13.8	15.6	29.4	15.5	14.4	29.9	0.5	98.3
⑩ごみを出す	11.9	13.8	25.7	10.2	13.7	23.9	ー1.8	107.5
⑪朝、新聞を取る	13.2	11.1	24.3	8.8	10.2	19.0	―5.3	127.9
⑫皆の部屋の掃除	8.3	10.8	19.1	12.0	12.9	24.9	5.8	76.7
⑬簡単な料理作り	8.6	7.3	15.9	11.0	16.2	27.2	11.3	58.5
⑭食器を洗う	6.6	10.8	17.4	9.1	15.2	24.3	6.9	71.6
⑮回覧板を回す	9.8	6.3	16.1	9.2	10.4	19.6	3.5	82.1
⑯食器を拭く	7.1	6.8	13.9	8.0	11.8	19.8	6.0	70.2
⑰洗濯物を干す	6.4	7.9	14.3	6.5	12.5	19.0	4.7	75.3
⑱トイレ掃除	2.7	4.1	6.8	4.1	5.8	9.9	3.1	68.7
18 項目の平均			30.6			36.3	5.7	84.3

差＝女子―男子（プラスは女子の方がしている割合が多い）
割合＝男子÷女子（100.0 を割る分、男子の手伝いが少ない）

なお、手伝いの学年別集計の結果は表 29 の通りで、18 項目の内、14 項目で、小 4 から小 6 へ移るにつれて、手伝い率が低下し、上がるのは 4 項目にすぎない。したがって、学年が上がるにつれて、手伝いをしなくなる子どもが多くなる傾向が得られている。高学年になると学習塾通いをする子どもが増え、手伝いの時間をとりにくくなるのであろうか。

表 29　子どもの手伝い×学年ーー差が少ない。小４＞小 6――（%）

	小４	小５	小６	差	割合
①食後、食器を運ぶ	80.8	82.1	81.3	0.5	99.4
②茶碗や箸を並べる	69.7	70.0	66.0	―3.7	105.6
③ご飯をよそう	59.5	58.3	58.4	―1.1	101.9
④テーブルを拭く	54.1	53.1	51.1	―3.0	105.9
⑤洗濯物をしまう	37.7	36.5	38.1	0.4	100.0
⑥玄関の靴を揃える	39.2	38.8	32.7	―6.5	119.9
⑦自分の机回りの掃除	31.4	36.4	36.6	5.2	85.8
⑧洗濯物をたたむ	37.1	23.1	26.8	-10.3	138.4
⑨お風呂の掃除	31.2	28.8	29.0	―2.2	107.6
⑩ごみを出す	25.2	27.3	23.2	―2.0	108.6
⑪朝、新聞を取る	23.5	22.2	19.7	―3.8	119.3
⑫皆の部屋の掃除	30.8	30.4	35.1	4.3	87.7
⑬簡単な料理を作る	25.6	21.8	17.1	―8.5	149.7
⑭食器を洗う	22.3	23.6	17.0	―5.3	131.2
⑮回覧板を回す	20.3	17.2	15.4	―4.9	131.8
⑯食器を拭く	18.8	19.5	12.7	―6.1	148.0
⑰洗濯物を干す	18.0	17.1	14.7	―3.3	122.4
⑱トイレ掃除	9.3	10.4	5.8	―3.5	160.3

18 項目の平均	35.3	34.3	32.3	-3.0	91.5

数値は「毎日やる」＋「週 3 回程度やる」割合

3）手伝った方がよいか

それでは、子どもは「手伝い」について、どう思っているのか。表 27 で紹介した 18 の手伝いについて、そうした手伝いを「した方がよい」と思っているかを尋ねてみた。表 30 に示したように、18 項目のすべてについて、「手伝った方がよい」が 6 割を超えた。細かく見ていくと、「①食後、食器を運ぶ（91.6%）」から、「⑨洗濯物をしまう（80.7%）」までの 9 項目は「手伝った方がよい」が 8 割を超える。18 項目を平均して、「した方がよい」が 77.8%と、8 割に迫る。したがって、子どもたちはあまり手伝ってはいないが、それでも、「手伝いをした方がよい」と思っていることが分る。

表 30　手伝った方がよい家事――どの手伝いも「した方がよい」と思う――（%）

	ぜひした方が良い	まあした方が良い	小　計	あまりしなくとも良い	しなくとも良い
①食後、食器を運ぶ	69.2	22.4	91.6	5.1	3.3
②自分の机回りの掃除	63.1	26.6	89.7	5.1	5.2
③茶碗や箸を並べる	54.7	34.4	89.1	6.9	4.0
④食事の机を拭く	54.5	33.6	88.1	7.8	4.1
⑤ご飯をよそう	50.5	35.2	85.7	10.1	4.2
⑥洗濯物をたたむ	45.2	37.8	83.0	12.3	4.7
⑦玄関の靴を揃える	49.0	33.6	82.6	10.1	7.3
⑧皆で使う部屋の掃除	44.2	37.1	81.3	13.7	5.0
⑨洗濯物をしまう	44.7	36.0	80.7	12.6	6.7
⑩お風呂の掃除	43.8	35.7	79.5	13.2	7.3
⑪ごみを出す	39.9	36.7	76.6	14.6	8.8
⑫洗濯物を干す	32.4	41.6	73.9	18.9	7.2
⑬食器を洗う	33.4	40.1	73.5	18.4	8.1
⑭簡単な料理を作る	33.3	37.9	71.2	20.2	8.6
⑮食器を拭く	31.3	37.3	68.6	19.1	12.3
⑯朝、新聞を取る	34.1	30.3	64.4	16.1	19.5
⑰トイレ掃除	25.0	35.9	60.9	24.8	14.3
⑱近所に回覧板を回す	33.0	27.5	60.5	14.1	25.4
18 項目の平均	50.8	27.0	77.8	13.5	8.7

このように子どもは手伝いをした方が良いと思っている。そこで、「実際にしている手伝い（表 27」と「手伝った方がよいと思っている者（表 30)」との関連を調べると、表 31 の

通りとなる。実際に手伝っている割合が 1 位の「①食後、食器を運ぶ」は「手伝った方がよい」でも1位、手伝いが 2 位の「②茶碗や箸を並べる」は「手伝った方がよい」で3位である。したがって、子どもは「した方がよい」と思っていることを「手伝っている」といえよう。

表 31　「している」手伝いと「した方が良い」手伝い
――順位は、ほとんど一致――（%）

	している			した方がよい	
	毎日	週 3	小計	順位	小計
①食後、食器を運ぶ	68.0	13.3	81.3	①	91.6
②茶碗や箸を並べる	46.6	21.7	68.3	③	89.1
③ご飯をよそう	33.8	24.9	58.7	⑤	85.8
④テーブルを拭く	30.8	21.7	52.5	④	88.1
⑤洗濯物をしまう	20.5	17.0	37.5	⑨	80.7
⑥玄関の靴を揃える	19.9	16.8	36.7	⑦	82.6
⑦自分の机回りの掃除	19.3	15.3	34.6	②	89.7
⑧洗濯物をたたむ	13.7	17.1	30.8	⑥	83.1
⑨お風呂の掃除	14.7	15.0	29.7	⑩	79.5
⑩ごみを出す	11.2	14.0	25.2	⑪	76.5
⑪朝、新聞を取る	11.3	10.7	22.0	⑯	64.4
⑫みんなの部屋の掃除	9.9	11.9	21.8	⑧	44.3
⑬簡単な料理を作る	9.7	11.9	21.6	⑭	71.2
⑭食器を洗う	7.8	12.9	20.7	⑬	72.5
⑮近所に回覧板を回す	9.5	8.1	17.6	⑱	60.5
⑯食器を拭く	7.7	9.2	16.9	⑮	68.6
⑰洗濯物を干す	6.3	10.2	16.5	⑫	73.9
⑱トイレ掃除	3.3	5.0	8.3	⑰	60.9

表 32 は、「手伝った方がよい」家事の性別の集計結果で、「⑯朝、新聞を取る」を除く、１７の項目で女子の方がした方がよいと感じている割合が多い。単純に１８項目の平均をとると、女子の「した方がよい」が 82.7%で、男子の 71.6%より、11.1%の開きが見られる。したがって、女子は男子より手伝った方がよいと思っているのであろう。

表 32　手伝った方がよい家事×性別――女子＞男子だが、差は少ない――　（%）

	男　子			女　子			差	割　合
	ぜひ	まあ	小計	ぜひ	まあ	小計		
①食後、食器を運ぶ	65.3	23.1	88.4	74.4	20.8	95.2	6.8	92.9
②自分の机回りの掃除	55.8	28.9	84.7	72.0	23.6	95.6	10.9	88.6
③茶碗や箸を並べる	49.8	36.4	86.2	60.6	32.0	92.6	6.4	93.1

④食事の机を拭く	48.4	34.7	83.1	61.9	31.9	93.8	10.7	88.6
⑤ご飯をよそう	45.5	36.5	82.0	56.7	33.3	90.0	8.0	91.1
⑥洗濯物をたたむ	40.3	37.1	77.4	51.3	38.2	89.5	12.1	86.5
⑦玄関の靴を揃える	44.5	32.8	77.3	54.7	33.7	88.4	11.1	87.4
⑧皆で使う部屋の掃除	40.9	36.2	77.1	48.0	38.3	86.3	9.2	89.3
⑨洗濯物をしまう	41.1	33.2	74.3	48.6	39.1	87.7	13.4	84.7
⑩お風呂の掃除	39.6	35.2	74.8	48.9	35.8	84.7	9.9	88.3
⑪ごみを出す	42.1	34.2	75.3	36.9	39.2	76.1	0.8	98.9
⑫洗濯物を干す	30.4	38.4	68.8	34.8	45.3	80.1	11.3	86.9
⑬食器を洗う	30.0	37.4	67.4	37.3	43.5	80.8	13.4	83.4
⑭簡単な料理を作る	27.2	34.4	61.6	40.2	41.7	81.9	10.3	75.2
⑮食器を拭く	26.8	37.9	64.7	36.4	36.6	71.0	6.3	91.1
⑯朝、新聞を取る	35.3	28.8	64.1	32.2	31.6	63.8	—0.3	100.5
⑰トイレ掃除	23.2	31.3	54.5	27.7	40.6	68.3	13.8	79.5
⑱近所に回覧板を回す	31.1	25.8	56.9	35.2	28.9	64.1	7.2	88.8
18 項目の平均			71.6			82.7	11.1	86.6

差＝女子—男子（プラスは女子の方がした方が良いと思う割合が多い）
割合＝男子÷女子（100.0 を割る分、女子が「手伝った方が良い」と思う割合が多い）

表 33 に学年別の集計結果を示した。学年差は少ないが、小 4 から小 6 へなるにつれて、「手伝った方が良い」が低下するのは 5 項目、残りの 13 項目は数値が上昇している。そうした意味では、学年が上がるにつれて、「手伝った方がよい」という思いがやや増すのであろう。

表 33　手伝った方がよい家事×学年——差は少ないーー　（%）

	4 年	5 年	6 年	差	割　合
①食後、食器を運ぶ	90.5	91.2	93.5	2.0	96.8
②自分の机回りの掃除	96.6	88.0	91.7	—4.9	105.3
③茶碗や箸を並べる	89.3	87.9	90.3	1.0	98.9
④食事の机を拭く	88.7	88.0	87.6	—1.1	101.3
⑤ご飯をよそう	86.3	85.2	86.7	0.4	99.6
⑥洗濯物をたたむ	84.2	84.2	82.6	—1.6	101.9
⑦玄関の靴を揃える	81.4	84.8	81.9	0.5	99.4
⑧皆で使う部屋の掃除	80.1	80.2	83.9	3.8	95.5
⑨洗濯物をしまう	78.8	79.6	83.5	4.7	94.3
⑩お風呂の掃除	80.2	78.5	79.5	—0.7	100.9
⑪ごみを出す	78.7	72.2	77.6	—1.1	101.4
⑫洗濯物を干す	72.8	73.5	75.6	2.8	96.3

⑬食器を洗う	71.5	73.9	75.4	3.9	94.8
⑭簡単な料理を作る	71.2	71.0	71.4	0.2	99.7
⑮食器を拭く	67.4	69.4	69.3	1.9	97.3
⑯朝、新聞を取る	68.2	53.9	68.3	0.1	99.9
⑰トイレ掃除	60.6	60.7	61.6	1.0	98.4
⑱近所に回覧板を回す	67.5	52.1	69.7	1.8	97.0
18 項目の平均	78.6	76.4	79.4	0.8	100.6

差＝6 年―4 年（プラスは 6 年の方がした方が良いと思う割合が多い）

割合＝4 年÷6 年（100.0 を割る分、6 年が「手伝わなくても良い」と思う割合が多い）

表 29 によると、学年が上がるにつれて、実際の手伝いは 3.0%程減ったが、手伝う気持ちは 0.8%増加している。したがって、学年差は少ない。しかし、6 年生の手伝いは減っているものの、手伝いをする必要はないとは思っていないことが分かる。

4） 手伝いへの評価

それでは、お手伝いをすることについて、子どもはどう考えているのか。表 34 によれば、お手伝いをしている子どもは、「④勉強に役立つ（43.7%）」とは思わないが、「①幸せな家庭を作れる（83.8%）」、「②思いやりのある人になれる（81.2%）」、「③よく気がつく人になれる（80.9%）」と思っている。手伝っている子の将来は明るいという見方である。なお、表 35 によれば、お手伝いの効用を男子より女子が信じているという結果が得られている。

表 34　お手伝いの効用――思いやりのある人になれる――　（%）

	とても	わりと	（小計）	あまり	全然
①幸せな家庭を作れる	52.2	31.6	83.8	11.4	4.9
②思いやりのある人に	50.1	31.1	81.2	14.4	4.4
③よく気がつく人に	43.8	37.1	80.9	14.1	5.0
④勉強に役立つ	11.9	31.8	43.7	38.4	17.9

表 35　お手伝いの効用×性差――女子は効用を信じてーー（%）

	男子	女子	差	割合
①幸せな家庭を作れる	44.5	61.0	16.5	73.0
②思いやりのある人に	42.5	57.9	15.4	73.4
③よく気がつく人に	36.9	51.3	14.4	71.9
④勉強に役立つ	7.6	15.9	8.3	47.8

「とても思う」割合

差＝女子―男子（プラスは女子の方が効用があると思う割合が多い）

割合＝男子÷女子（100.0 を割る分、女子が「効用がある」と思う割合が多い）

表 36　お手伝いの効用×学年

——高学年になると、効用を信じなくなるーー（%）

	4 年	5 年	6 年	差	割 合
①幸せな家庭を作れる	57.8	49.7	48.5	― 9.3	119.2
②思いやりのある人に	56.8	46.1	46.3	―10.5	122.7
③よく気がつく人に	49.1	41.5	40.4	― 8.7	121.5
④勉強に役立つ	16.0	11.4	7.4	― 8.6	216.2

「とても思う」割合

差＝6 年―4 年（マイナスは 4 年の方が効用を信じている割合が多い）

割合＝4 年÷6 年（100.0 を超える分、4 年が効用を信じている割合が多い）

女子は主婦になるのだから、手伝いをしておいた方がよいといわれる。そうした感覚を尋ねた結果が表 37 で、「とても」の 57.0%を含めて、89.1%が「(女子は将来のために手伝いをした方がよい) そう思う」と答えている。それでは、男子の手伝いはどう考えるのか。表 38 によると、「男子も手伝いをしておいた方がよい」が「とても」の 32.0%を含めて、「そう思う」が 78.1%で 8 割に達する。なお、「そう思う」割合は女子の 81.7%は当然としても、男子の 74.5 も「手伝いはしておいた方がよい」と思っている。このように見ると、男女ともに、手伝った方がよいという気持ちが浸透しているのが分る。

表 37　女子は必要になるから、覚えた方がよい

——9 割の子どもがそう思っているーー　（%）

		とても	わりと	小計	あまり	全然
全　体		57.0	32.1	89.1	8.1	2.8
性　別	男　子	43.8	40.2	84.0	11.4	4.6
	女　子	69.7	24.2	93.9	5.0	1.1
学　年	4　年	65.2	26.1	91.3	6.3	2.4
	5　年	54.4	32.2	86.6	9.6	3.8
	6　年	50.4	38.4	88.8	8.8	2.4
地　域	関　東	49.9	38.1	88.0	8.4	3.6
	関　西	63.1	27.0	90.1	7.8	2.1

表 38　男子も将来のために覚えて方がよい

——男の子も覚えておいた方がよいが 8 割弱——　（%）

		とても	わりと	小計	あまり	全然
全　体		32.0	46.1	78.1	16.3	5.6
性　別	男　子	29.7	45.2	74.9	18.3	6.8
	女　子	34.9	46.8	81.7	14.2	4.1

学　年	4　年	36.1	44.9	81.0	13.2	5.8
	5　年	31.5	45.2	76.7	16.6	6.7
	6　年	28.3	48.0	76.3	19.4	4.3
地　域	関　東	30.4	48.3	78.7	14.7	6.6
	関　西	33.3	44.3	77.6	17.6	4.8

このように子どもはそれ程手伝いをしているわけではないが、「手伝い」については、それをした方がよいし、手伝っている子はよい子で、手伝いは将来に必要だと感じている。現在の子どもたちは手伝いなど古臭いし、そんなことをしなくてもよいというのでは思っていた。しかし、手伝いについて子どもが好意的な評価を下しているのは意外だった。

4　1984 年調査との対比

1）子どもの手伝いの変化

調査の設計の項でふれたように、本調査では 2011 年の子どもの手伝いの姿を、1984 年 2 月に実施した「手伝い調査」との対比の中でとらえようとした。1984 年の調査報告書は「お手伝い一小学生ナウ　VOL4－5」（深谷昌志。東訓正、山田敏子編、福武書店、1984 年 8 月刊）で刊行されたものである。しかし、調査の実施から 4 半世紀を過ぎているので、調査票から現在に適しない項目などを削除し、比較の可能な項目はそのまま残す形で調査票を作成した。

念のため、1984（昭和 59）年を振り返ってみると、3 月にグリコ事件が発生し、春の高校選抜野球で桑田と清原を擁する PL 学院が優勝している。夏にロスオリンピックが開催された年でもある。ヒット曲をみると、わらべの「もしも明日が一一」、五木ひろしの「長良川艶歌」、高橋眞梨子の「桃色吐息」などがある。花王では紙おむつの「メリーズ」やハンドソープの「ビオレ U」を発売した年でもある。今というには昔だが、昔にしては新しい時代である。

1984 年と 2011 年との間に 27 年の歳月が流れている。そうした歳月の間に、子どもの手伝いはどう変化してきたのか。結果を紹介すると、子どもの手伝いは表 39 のように変化している。表中の右欄は 2011 年調査から 1984 年調査を引いているので、「差」がプラスの項目は 2011 年の方が手伝っている子どもが増えたことを意味する。そして、18 項目の内、13 項目がプラスで、マイナスは 5 項目にすぎない。そうした中で、マイナスが大きいのは、「⑪朝、新聞を取る（－14.4%）」と「⑮近所に回覧板を回す（－12.8%）」である。逆に、プラスが多い、つまり、今の方が昔より手伝っている項目は「①食後、食器を運ぶ(16.4%)」、「⑨お風呂の掃除（8.5%）」などである。

そして、全体としてみると、18 項目の「手伝っている」割合は 1984 年の 31.2%から 2011 年の 33.4%へ 2.2%ほど上昇している。したがって、僅かな差ではあるが、今の子どもの方が手伝っている割合が増加しているといえよう。調査に先立って、今の子どもの方が手伝っていないように思っていた。それだけに、今の子の方が手伝っているという今回の結果は予想外の印象を受けた。

表 39　　手伝う割合の変化――今の子どもの方が手伝っている一一　　（%）

	1984 調査			2011 年調査			差
	毎日	週 3	小計	毎日	週 3	小計	
①食後、食器を運ぶ	45.8	19.1	64.9	68.0	13.3	81.3	16.4
②茶碗や箸を並べる	33.9	26.5	60.4	46.6	21.7	68.4	8.0
③ご飯をよそう	24.7	30.4	55.1	33.8	24.9	58.7	3.6
④テーブルを拭く	28.4	20.2	48.6	30.9	21.7	52.6	4.0
⑤洗濯物をしまう	15.9	15.6	31.5	20.5	17.0	37.5	6.0

⑥玄関の靴を揃える	13.5	16.9	30.4	19.9	16.8	36.7	6.3
⑦自分の机回りの掃除	19.0	23.3	42.3	19.3	15.3	34.6	― 7.7
⑧洗濯物をたたむ	8.0	16.0	24.0	13.7	17.1	30.8	6.8
⑨お風呂の掃除	9.6	11.6	21.2	14.7	15.0	29.7	8.5
⑩ごみを出す	6.4	10.5	16.9	11.2	14.0	25.2	8.3
⑪朝、新聞を取る	18.6	17.8	36.4	11.3	10.7	22.0	―14.4
⑫みんなの部屋の掃除	6.4	14.0	20.4	9.9	11.9	21.8	1.4
⑬簡単な料理を作る	5.4	20.8	26.2	9.7	11.9	21.6	― 3.6
⑭食器を洗う	5.0	14.8	19.8	7.8	12.9	20.7	0.9
⑮近所に回覧板を回す	19.5	10.8	30.4	9.5	8.1	17.6	―12.8
⑯食器を拭く	6.2	14.5	20.7	7.7	9.2	16.9	― 3.8
⑰洗濯物を干す	1.3	7.8	9.1	6.3	10.2	16.5	7.4
⑱トイレ掃除	1.2	2.4	3.6	3.3	5.0	8.3	4.7
18 項目の平均	―	―	31.2	―	―	33.4	2.2

差＝2011 年―1884 年＝プラスは 2011 年の子どもは手伝っている

なお、表 39 を性別に集計した結果が表 40 である。下の表が示すように、男子は 18 項目中の 15 項目で 1984 年より手伝いが増え、18 項目を平均した結果でも 7.7%手伝う割合が増加している。それに対し、女子は 1984 年より増えたのが 5 項目で、13 項目で減少している。そして、18 項目の平均でも 3.3%減少している。

	18 項目中、2011 の方が多い項目	1984 年と比べ、2011 年
男子	15 項目	7.7%増
女子	5 項目	3.3%減
全体	13 項目	2.2%増

したがって、1984 年より、女子の手伝いが減り、手伝う男子が増加した。男子の増加が大きいので全体として子どもの手伝いが増えたというのが表 39 の解釈であろう。

表 40　子どもの手伝い×性差

――男子は手伝うようになり、女子はやや手伝いが減る――　　(%)

	男　子			女　子		
	1984	2011	差	1984	2011	差

①食後食器を運ぶ	52.8	79.1	26.3	77.0	83.9	6.9
②茶碗や箸並べる	46.7	65.7	19.0	74.3	71.7	—2.6
③ご飯をよそう	39.1	53.7	14.6	71.3	64.0	—7.3
④テーブルを拭く	32.9	46.1	13.2	64.3	59.9	—4.4
⑤洗濯物をしまう	16.5	35.5	19.0	46.7	39.7	—7.0
⑥玄関の靴を揃え	21.4	32.1	10.7	39.6	42.0	—2.4
⑦自分の机回り	32.0	28.8	—3.2	52.5	40.9	—11.6
⑧洗濯物をたたむ	11.3	27.7	16.4	36.8	34.1	— 2.7
⑨お風呂の掃除	19.5	29.4	9.9	23.0	29.9	6.9
⑩ごみを出す	15.6	25.7	10.1	18.0	23.9	5.9
⑪朝、新聞を取る	38.9	24.3	14.6	33.7	19.0	—14.7
⑫皆の部屋の掃除	15.6	19.1	3.5	25.1	24.9	— 0.2
⑬簡単な料理作り	20.3	15.9	— 4.4	32.3	27.2	— 5.1
⑭食器を洗う	8.4	17.4	9.0	31.2	24.3	— 6.9
⑮回覧板を回す	24.6	16.1	— 8.5	36.1	19.6	—16.5
⑯食器を拭く	9.7	13.9	4.2	31.8	19.8	—12.0
⑰洗濯物を干す	4.3	14.3	10.0	13.9	19.0	5.1
⑱トイレ掃除	2.2	6.8	4.6	5.1	9.9	4.8
18 項目の平均	22.9	30.6	7.7	39.6	36.3	— 3.3

差＝2011 年—1984 年（プラスは 2011 年の方がしている割合が多い）

2）手伝いと性差

それでは、手伝いの実態はともあれ、「手伝い」についての意識は変化したのであろうか。「手伝った方がよい」と思う割合の変化を表 41 に示した。1984 年より「そう思う（手伝った方が良いと思う）」割合が減ったのは 3 項目に過ぎず、それも、「⑱近所に回覧板を回す」のような行為そのものが減ったものが含まれている。そして、残りの 15 項目は「した方が良い」割合が増加している。さらに、表の下欄に示すように、18 項目を平均して、「手伝った方がよい」と思う割合が 1984 年の 73.2%から 2011 年の 77.9%へ、4.7%増加している。したがって、子どもの「手伝った方がよい」という気持ちが増しているのが分る。

表 41　手伝った方がよい家事の変化——今の子の方が手伝う気がやや増した—（%）

	1984 年			2011 年			
	是非した方が	まあした方が	良い小	是非した方が	まあした方が	良い小計	差

	良い	良い	計	良い	良い		
①食後、食器を運ぶ	61.0	26.0	87.0	69.2	22.4	91.6	4.6
②自分の机回りの掃除	71.7	21.2	92.9	63.1	26.6	89.7	― 3.2
③茶碗や箸を並べる	42.7	40.2	82.9	54.7	34.4	89.1	6.2
④食事の机を拭く	53.5	30.9	84.4	54.5	33.6	88.1	3.7
⑤ご飯をよそう	37.5	39.6	77.1	50.5	35.2	85.7	8.7
⑥洗濯物をたたむ	36.0	38.4	74.4	45.2	37.8	83.0	8.7
⑦玄関の靴を揃える	48.3	33.7	82.0	49.0	33.6	82.6	0.6
⑧皆で使う部屋の掃除	42.0	38.5	80.5	44.2	37.1	81.3	0.9
⑨洗濯物をしまう	39.1	33.7	72.8	44.7	36.0	80.7	7.9
⑩お風呂の掃除	32.3	39.0	71.3	43.8	35.7	79.5	8.2
⑪ごみを出す	30.0	37.6	67.6	39.9	36.7	76.6	9.9
⑫洗濯物を干す	20.1	36.1	56.2	32.4	41.6	73.9	17.7
⑬食器を洗う	24.5	39.4	63.9	33.4	40.1	72.5	8.6
⑭簡単な料理を作る	22.1	38.9	61.0	33.3	37.9	71.2	10.2
⑮食器を拭く	25.7	37.7	63.4	31.3	37.3	68.6	5.2
⑯朝、新聞を取る	466	31.4	78.0	34.1	30.3	64.4	―13.6
⑰トイレ掃除	16.0	28.2	44.2	25.0	35.9	60.9	16.7
⑱近所に回覧板を回す	43.6	33.7	77.3	33.0	27.5	60.5	―16.8
18 項目の平均	―	―	73.2	―	―	77.8	4.6

それでは、「手伝った方がよい」について、男子と女子とでは意識がどう変化しているのか。性別の変化を確かめると表 42 の通りになる。下の表に示すように、女子は「手伝った方がよい」と思う気持ちがやや減少している。それに対し、男子は「手伝った方がよい」と思う割合も 11.8%も増加している。表 39 で、男子の手伝いが増えたと述べたが、それは行動だけでなく、「手伝った方がよい」と意識も変化してきている。男子を中心としたそうした意識の変化が「手伝う」という行動の変化をもたらしたのであろうか。

こうした意識の変化をまとめると、以下のように、女子は「手伝い」の行動も意識も低下しているが、男子は増加している。

	18 項目中、2011 の方が多い項目	1984 年と比べ 2011 年の意識の変化	実際の手伝いの変化（表 39）
男子	16 項目	11.8%増	7.7%増
女子	13 項目	2.9%減	3.3%減

全体	15 項目	4.8%増	2.2%増

表 42　手伝った方がよい家事の変化×性差

ーー男子は手伝う気持ちが増し、女子はやや低下ーー（%）

	男　子			女　子		
	1984	2011	差	1984	2011	差
①食後、食器を運ぶ	80.0	88.4	8.4	94.1	95.2	1.1
②自分の机回りの掃除	89.7	84.7	― 5.0	96.1	95.6	― 0.5
③茶碗や箸を並べる	73.4	86.2	12.8	92.4	92.6	0.2
④食事の机を拭く	75.8	83.1	7.3	93.2	93.8	0.6
⑤ご飯をよそう	66.3	82.0	15.7	88.1	90.0	1.9
⑥洗濯物をたたむ	60.1	77.4	17.3	88.7	89.5	0.8
⑦玄関の靴を揃える	74.4	77.3	2.9	89.5	88.4	― 1.1
⑧皆で使う部屋の掃除	74.6	77.1	2.5	76.4	86.3	9.9
⑨洗濯物をしまう	59.7	74.3	14.6	86.2	87.7	1.5
⑩お風呂の掃除	67.6	74.8	7.2	74.9	84.7	9.8
⑪ごみを出す	67.3	75.3	8.0	67.8	76.1	8.3
⑫洗濯物を干す	45.5	68.8	23.3	67.1	80.1	13.0
⑬食器を洗う	48.2	67.4	19.2	80.0	80.8	0.8
⑭簡単な料理を作る	52.2	61.6	9.4	70.0	81.9	11.9
⑮食器を拭く	50.1	64.7	14.6	77.0	71.0	― 6.0
⑯朝、新聞を取る	81.3	64.1	―17.2	74.6	63.8	―10.8
⑰トイレ掃除	35.7	54.5	18.8	52.8	68.3	15.5
⑱近所に回覧板を回す	73.4	56.9	16.5	81.3	64.1	―17.2
18 項目の平均	61.5	73.3	11.8	85.7	82.8	― 2.9

「是非」＋「まあ」した方が良い割合

3）家事の担い手

これまでふれてきたように男子を中心に、子どもの手伝う意欲が高まっていた。そうした子どもの意識に影響を及ぼす要因を探るために表 43 を作成した。これは、母親の家事分担をどの程度の担うかについての変化を示している。表の小計欄には「全部母親」と「主に母親」を加算して集計しているが、「全部母親」に着目すると、1984 年の場合、4 項目を平均して、母親が家事の 72.7%を担っている。「①洗濯」や「②トイレ掃除」、「③夕食を作る」のほぼ 8 割を「全部母親」が担当している時代である。それに対し、2011 年になると、

表中の 4 項目を母親が「全部担う」割合は 43.0%へ激減している。

こうした数値が示唆するように、1984 年の家庭は母親中心に回っていた。しかし、2011 年になると、母親が中心なことは変わりないが、家族が参加する感じに変化している。家庭についてのそうした変化が、それまで手伝いをしなかった男子の家事参加を促したのであろう。

表 43　母親の家事分担の対比――――1984 年=母親中心の家事――（%）

	1984 年			2011 年			差
	全部母親	主に母親	母親小計	全部母親	主に母親	母親小計	
①洗濯	81.2	13.5	94.7	48.7	29.3	78.0	—16.7
②トイレ掃除	80.9	10.0	90.9	50.9	22.5	73.4	—17.5
③夕食を作る	76.5	18.0	94.5	43.8	38.9	82.7	—11.8
④みんなの部屋の掃除	52.2	21.7	73.9	28.4	35.5	63.9	—10.0
4 項目の平均	72.7	15.8	88.3	43.0	31.6	74.6	—13.7

参考までに表 44 を示した。これは、1984 年調査（2011 年調査ではこの項目は加えていない）で、子どもたちに「将来、結婚したら、誰が家事を担うか」を尋ねた結果である。「①洗濯」や「②夕食を作る」を「全部母親が作る」と思う子どもは 74.1%に達する。しかも、男子（70.7%）だけでなく、女子（77.8%）がそう思っている。ということは、男女とも家事の主な担い手は母親という感覚を抱いているのが分る。しかも、これは、現在の家庭でなく、自分が築く未来の家庭についての家事分担の姿である。

表 44　将来、家庭を持ったら誰が家事をするか――参考、1984 年
――――家事の担当は母親という時代――

	全　体			男子	女子
	全部母親	主に母親	母親小計	全部母親	全部母親
①洗濯	80.3	13.2	93.5	75.0	85.8
②夕食を作る	78.2	15.9	94.1	73.5	83.0
③トイレ掃除	63.9	13.3	77.2	63.6	64.5
④3 項目の平均	74.1	14.1	88.2	70.7	77.8

このように見てくると、1984 年は母親中心の家事が行われていた時代だった。しかし、2011 年になると、家族がみんなで家事を担う感じに変化している。ジェンダー・ロールの変化という云い方が正確かもしれないが、そうした変化を受けて、男の子が家事をするよ

うになり、それが、子どもの家事手伝い率を上げた。といっても、全体としてみれば、子どもの手伝いはそれ程多くなっていない印象を受ける。

５「手伝う子」と「手伝わない子」

１）　手伝いの尺度

これまでふれてきたように子どもたちは予想した以上に手伝うことを大事と考え、手伝う気持ちを抱いていた。といっても、子どもの中に「手伝っている子」と「手伝っていない子」とがいる。そこで、どういう子どもが手伝っているのか、手伝う子の属性を確かめることにした。

具体的な手続きとしては、「子どもが手伝っているか」（問 9）の１～18 の項目について、加算する。各項目は「毎日やる」＝１から「一度もしたことがない」の 6 までに分布しているので、素点は 18～108（18×6）に分布する。そこで、サンプルを以下の基準で 3 分する。

１）　「手伝う群」＝上位 4 分の１＝素点が 50 点以下の 218 名（23.3%）

２）　「中間群」＝中位 2 分の１＝素点が 51～73 点の 487 名（52.0%）

３）　「手伝わない群」＝下位 4 分の１＝素点が 74 点以上の 231 名（24.7%）

なお、今回のサンプルは 1140 名だが、尺度化にあたり、項目により未記入のある 204 名を除外したので、本尺度の有効サンプルは 936 名である。

なお、こうした場合の分類法として、全体を 3 等分、あるいは、4 等分するやり方もある。今回は、「手伝っている子」と「手伝っていない子」の差を際立たせたかったので、上述したような 3 分類を採用することにした。

また、以下の分析では、子どもを「手伝う群」「中間群」、「手伝わない群」に分けているので、3 群の間に差が見られるかどうか、参考までに検定の数値を示すことにした。

＊は 5%レベル、＊＊は 1%レベル、＊＊＊は 0.1%レベルで有意な差が見られることを示す。したがって、＊＊なら、1%レベルなので、そういうことが言えない確率が１%となる。換言するなら、1.00－0.01＝0.99、つまり、統計的には 99%そういえることを意味する。

具体例をあげると、手伝いの類型と学年との関連について、検定の P 値は 0.258 で、0..05（5%レベル）はむろん、0.10（10%レベル）を上回る。ということは、関連するというには 10%以上の誤差がある。したがって、「手伝うかどうかと学年」は関連するといえないことになる。

手伝いの類型×学年　　(%)

	手伝う群	中間群	手伝わない群
小学 4 年生	38.2	32.1	38.0
小学５年生	27.2	26.3	26.2
小学６年生	34.6	41.6	25.8

P 値＝0.258

手伝いと性別との関連では、以下のような数値で、検定結果はｐ＜0.001 になる。「男子より女子の方が手伝っている」ということは、統計的に 0.1％レベル（1―0.001＝99.9％はいうことができる）でいえることを意味する。

手伝いの類型×性別　　（％）

	手伝う群	中間群	手伝わない群
男子	43.5	51.7	66.5
女子	56.5	48.3	33.5

＊＊＊　ｐ＜0.001　　Ｐ値＝0.000

2）　手伝う子の家庭的な背景

まず、手伝う子どもの家族的な背景を探ってみよう。表 45 から明らかなように、手伝う群の中で一人っ子は 11.1％に過ぎないが、手伝わない群の中で一人っ子は 22.3％を占める。したがって、手伝わない群に一人っ子が多い。換言すると、統計的に見ると、一人っ子は手伝わない場合が多い。

また、表 46 によれば、祖父母のいる 2 世代家族の「手伝わない群」は 30.3％だが、核家族の手伝わない子は 17.5％にとどまる。したがって、表 45 と表 46 とをあわせて考えると、「2 世代家族の一人っ子」は手伝わない可能性が強いが、「核家族できょうだいが 2 人」だと人手がないから手伝う子どもになる。しかし、人手が多く、その上、一人っ子だったら、手伝うこともなくとも当然という気持ちがする。

表 45　子どもの数×手伝いーー一人っ子は手伝う割合が少ないーー　　（％）

	全　体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差
①一人っ子	15.8	11.1	13.8	22.3	
②2 人以上	84.2	88.9	96.2	77.7	11.2

＊＊＊　ｐ＜0.001

表 46　家族の型×手伝いーー２世代家族の子は手伝う割合が少ないーー　　（％）

	全　体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差
①核家族	79.1	82.5	80.5	69.7	12.8
②2 世代家族	20.9	17.5	19.5	30.3	

＊＊　ｐ＜0.01

表 47 は母親の仕事と手伝いとの関連を示した。専業主婦の家庭は母親が家事を担うことが多いから子どもの手伝う割合が減る。しかし、フルタイムの家庭は母親が不在がちなので、子どもも家事を手伝うのではないか。そして、表 47 の結果でも、そうした傾向が得られているが、検定の数値が示すように、その差は表 45 や表 46 より少ない。つまり、専業主婦の家庭の子どもが手伝う割合は少ないことはたしかだ。しかし、祖父母のいる家の子は手伝わないと強くいえる程には、専業主婦の子についてはいえないという評価である。

表 47　母親の仕事×手伝いーーフルタイム＝手伝う、専業＝手伝わないーー　（%）

	全　体	手　伝う群	中間群	手伝わない群
①専業主婦	27.8	25.4	28.5	31.7
②パート	25.3	24.9	28.3	23.4
③フルタイム	26.4	27.3	24.7	21.1
④その他	20.5	22.4	18.4	23.9

＊　p＜0.05

なお、母親が家事をどの程度に担うかと子どもの手伝いとの関連は表 48 の通りである。当然といえばそれまでだが、「手伝わない群」の母親の 55.2%は、家事を全部母親が担っているが、「手伝う群」の母親が家事を全部やる割合は 30.5%にとどまる。

表 48　母の家事負担×手伝いーー母がやる＝手伝わないーー　（%）

	全　体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差	検　定
①トイレ掃除	50.9	39.6	50.2	64.9	—25.3	＊＊＊
②朝食を作る	48.9	35.8	47.7	65.4	—29.6	＊＊＊
③洗濯	48.7	39.2	44.9	64.2	—25.0	＊＊＊
④夕食を作る	43.8	38.7	40.3	53.5	—14.8	＊＊＊
⑤皆の部屋の掃除	28.4	16.1	24.0	46.1	—30.0	＊＊＊
⑥お風呂の掃除	21.1	13.8	15.7	37.0	—23.2	＊＊＊
6 項目の平均	40.3	30.5	37.1	55.2	—24.7	＊＊＊

「全部母親がやる」割合　　＊＊＊　p＜0.001

差は「手伝う群」－「手伝わない群」

このように子どもの手伝いは家庭環境に規定される面が見られる。例えば、手伝わない子どもの条件は①祖父母がいて、②一人っ子、③母親が専業主婦で、④その母がほとんどの家事を担う場合である。それに対し、手伝う子どもは、①核家族で、②子どもが 2 人以

上、③働く母親で、④母親の家事分担の割合が低い場合である。

3） 手伝う子どもの気持ち

これまで、子どもの手伝いと家庭環境との関連を考察してきたが、次に、手伝いについての子どもの気持ちと手伝いとの関連を検討してみよう。

表 49 は個々の手伝いと手伝いのグループとの関連を示している。「①食後、食器を運ぶ」から「⑱トイレ掃除」まで、すべての項目で、「手伝う群」の子は「毎日手伝っている」。そして、「手伝わない群」の手伝う割合はどの項目についても手伝う割合が低い。当然といえばそれまでだが、手伝わない子が例外的に手伝う項目などはないのであろう。

表 49　子どもの手伝い×手伝う割合

ー手伝う子=よく手伝う、手伝わない=全くしないーー　（%）

	全体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差	検定
①食後、食器を運ぶ	68.0	88.1	71.9	39.0	49.1	＊＊＊
②茶碗や箸を並べる	46.6	75.2	44.8	17.7	57.5	＊＊＊
③ご飯をよそう	33.8	60.6	29.4	13.0	47.6	＊＊＊
④テーブルを拭く	30.6	22.0	28.1	9.1	12.9	＊＊＊
⑤洗濯物をしまう	20.5	49.5	16.4	1.7	47.8	＊＊＊
⑥玄関の靴を揃える	19.9	43.1	14.0	6.5	36.6	＊＊＊
⑦自分の机回りの掃除	19.3	45.0	14.6	3.5	41.5	＊＊＊
⑧洗濯物をたたむ	13.7	39.0	7.4	1.3	37.7	＊＊＊
⑨お風呂の掃除	14.7	34.4	11.9	1.3	33.1	＊＊＊
⑩ごみを出す	11.2	29.4	6.2	0.9	28.5	＊＊＊
⑪朝、新聞を取る	11.3	30.7	7.2	1.7	29.0	＊＊＊
⑫みんなの部屋の掃除	9.9	29.4	4.1	0.4	29.0	＊＊＊
⑬簡単な料理を作る	9.7	25.2	4.3	2.2	23.0	＊＊＊
⑭食器を洗う	7.8	24.8	3.5	0.4	24.4	＊＊＊
⑮近所に回覧板を回す	9.5	25.7	5.7	0.9	24.8	＊＊＊
⑯食器を拭く	7.7	27.1	2.7	0.0	27.1	＊＊＊
⑰洗濯物を干す	6.3	20.6	1.8	1.3	19.3	＊＊＊
⑱トイレ掃除	3.3	12.8	0.6	0.0	12.8	＊＊＊
18 項目の平均	19.1	37.9	30.5	5.6	32.3	＊＊＊

6 回答選択肢中、「毎日やる」割合　　＊＊＊　p＜0.001

差=「手伝う子」－「手伝わない子」

表 50 は「手伝った方がよいと思う」と「手伝っている」との関連を示している。表を見れば明らかなように、「手伝う群」は「手伝う方がよい」と思って手伝っているのに対し、「手伝わない群」は「手伝う必要がない」と考えている。手伝うという「行動」は手伝った方がよいという「意識」の反映なのであろう。

表 50　手伝った方がよい×手伝い

ーー手伝い群＝「した方がよい」、手伝わない群＝しなくてもよいーー（%）

	全体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差	検定
①食後、食器を運ぶ	69.2	78.2	72.0	56.2	22.0	＊＊＊
②自分の机回りの掃除	63.1	73.8	65.0	50.2	23.6	＊＊＊
③茶碗や箸を並べる	54.7	76.2	53.7	38.0	38.2	＊＊＊
④食事の机を拭く	54.5	75.2	54.1	35.8	39.4	＊＊＊
⑤ご飯をよそう	50.6	67.9	50.9	32.3	35.7	＊＊＊
⑥洗濯物をたたむ	45.3	67.3	43.1	27.8	39.5	＊＊＊
⑦玄関の靴を揃える	49.0	60.2	47.6	37.1	23.1	＊＊＊
⑧皆で使う部屋の掃除	44.3	58.1	41.5	30.9	27.2	＊＊＊
⑨洗濯物をしまう	44.7	61.0	45.5	26.9	34.1	＊＊＊
⑩お風呂の掃除	43.8	59.7	44.2	29.1	30.6	＊＊＊
⑪ごみを出す	39.8	57.6	36.9	25.3	32.3	＊＊＊
⑫洗濯物を干す	32.3	50.7	25.2	21.1	29.6	＊＊＊
⑬食器を洗う	33.4	51.2	27.9	24.6	26.6	＊＊＊
⑭簡単な料理を作る	33.3	43.7	30.1	23.7	20.0	＊＊＊
⑮食器を拭く	31.3	52.1	26.3	17.2	34.9	＊＊＊
⑯朝、新聞を取る	34.1	48.3	29.6	29.2	19.1	＊＊＊
⑰トイレ掃除	25.0	45.3	18.8	15.7	29.6	＊＊＊
⑱近所に回覧板を回す	33.0	51.4	30.0	20.4	31.0	＊＊＊
18 項目の平均	43.4	59.9	41.2	30.1	29.8	＊＊＊

４回答選択肢中、「是非手伝った方がよい」と思う割合

「手伝うことが楽しい」かと「手伝う程度」とをクロスさせると、表５１の通りとなる。「手伝う群」の４割弱が手伝いを「とても楽しい」と思っている。しかし、「中間群」の楽しさは「かなり楽しい」となる。そして、「手伝わない群」の５割が手伝いは「楽しくない」と感じている。

表 51　手伝いが楽しい×手伝い

――手伝う群=楽しい、手伝わない群＝楽しくない――

	全　体	手伝う群	中間群	手伝わない群
とても楽しい	18.7	35.3	12.6	7.4
かなり楽しい	48.3	45.1	54.0	42.0
あまり楽しくない	26.3	15.3	26.8	39.4
全く楽しくない	6.8	4.2	6.6	11.3

＊＊＊　　p＜0.001

さらに、表 52 によれば、「手伝う群」の 76.0%は親からいわれたのでなく、「自分から手伝っている」と答えている。しかし、自分率は「中間群」では 46.6%、「手伝わない群」だと 25.7%に低下する。「手伝わない群」は親に言われてしぶしぶするので、手伝いが苦痛になり、ますます手伝いをしなくなるのであろう。

表 52　自分から手伝う×手伝い

――手伝う群=自分から、手伝わない群=親にいわれ――　　(%)

	全体	手　伝う群	中間群	手伝わない群
自分から	11.6	25.5	6.2	4.8
大体自分から	37.9	50.5	40.4	20.9
大体親から	42.8	21.8	46.8	58.7
親に言われ	7.7	2.3	6.6	15.7

＊＊＊　　p＜0.001

このように見てくると、「手伝い」という行為は「手伝いたいという自分の気持ち」に支えられると同時に、「手伝いは楽しい」という気持ちも手伝いの土台にあるように見える。

そうなると、家への意識と手伝いとの関連が問題になるが、表 53 のように、「⑨外食が多い」は手伝いと関係はない。しかし、検定の＊＊＊に注目すると、「手伝っている群」の子どもは、手伝っていない群の子どもと比べ、自分の家を「①食事がおいしい」、「⑤皆で助け合う」、「③皆が幸せ」や「②親類と仲がよい」と思っているのが分かる。

家庭の仲がよく、食事がおいしい。そうした家庭だと子どもは喜んで手伝いを始めるのであろう。そうした意味では、子どもの手伝いを支えるのは安定した家庭の雰囲気という結論になる。

表 53　家への心理的なコミット×手伝いーー手伝う子は家に心理的にコミットーー（%）

	全　体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差	検　定
①食事がおいしい	72.8	83.4	72.0	62.1	21.3	＊＊＊
②親類と仲がよい	53.5	61.4	53.7	46.3	15.1	＊＊
③皆が幸せ	52.1	63.3	50.2	47.3	16.0	＊＊
④家族の仲がよい	51.8	60.0	49.2	45.9	14.1	（0.071）
⑤皆で助け合う	31.6	48.1	28.4	21.1	27.0	＊＊＊
⑥経済的に豊か	30.1	37.3	30.1	21.5	15.8	＊＊＊
⑦近所の人と仲良く	26.9	38.4	25.2	20.5	17.9	＊＊＊
⑧皆で家の仕事	25.9	48.1	21.5	10.7	37.4	＊＊＊
⑨外食が多い	16.5	21.2	15.5	16.5	4.7	（0.211）
9 項目の平均	40.1	51.2	38.4	32.4	18.8	

数値は５回答選択肢の内、「とてもその通り」の割合

「差」は「手伝う群」－「手伝わない群」の数値

＊＊＊＝p＜0.001、＊＊＝p＜0.01　　（　）内の数値は参考までの P 値

念のため、「家にいる時の楽しさ」と「手伝い」との関連を調べると、表 54 のような結果が得られる。居心地がよく「とても楽しい」雰囲気の家庭だと子どもは自分から手伝いを始める。しかし、冷え切った家庭だと、子どもも手伝う気持ちになれないのかもしれない。

表 54　家が楽しい×手伝いーー手伝う子は家が楽しいーー（%）

	全体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差
①とても楽しい	54.3	62.6	50.7	49.8	12.8
②わりと楽しい	25.3	23.9	28.0	24.2	—
③少し楽しい	14.1	8.7	16.1	16.0	—
④あまり～全然楽しくない	6.3	4.6	5.2	9.9	—5.3

＊　p＜0.05　　（P 値＝0.016）

なお、手伝う子は、手伝いの意味を高く評価しているのが目につく。表 55 によれば、手伝う群は、手伝う子について、「②思いやりのある人になれる」や「①幸せな家庭を作れる」と、将来に明るい夢を抱いているのが分る。

表 55　　手伝いの効用×手伝うーー手伝う子は効用を信じるーー（%）

	全体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差	検　定
①幸せな家庭を作れる	52.2	66.5	51.9	37.8	28.7	＊＊＊
②思いやりのある人になる	50.0	60.9	50.1	40.4	20.5	＊＊＊
③よく気のつく人になる	43.8	59.1	41.6	36.1	23.0	＊＊＊
④勉強に役立つ	11.9	16.6	8.9	10.4	6.2	＊＊＊

「とてもそう思う」割合　　＊＊＊　　p＜0.001

4）　手伝う子と生活習慣

これまで考察してきたように、「手伝う」という行為の背景には家庭の雰囲気や子ども自身の意識が関連していた。手伝う子どもは、安定して家庭の中で、自分なりに家庭に役立ちたいと家事に参加している。

それでは、手伝う子どもは子どもとしてどういうタイプなのか。表 58 はテレビ視聴と手伝いとの関連を示している。テレビ視聴が 3 時間以上の子どもは、「手伝う群」の 19.4%にとどまるが、「中間群」では 44.2%、「手伝わない群」35.5%に達する。

調査にあたって、テレビ視聴と手伝いとはそれ程関係しないだろうと思っていた。しかし、表 56 によれば、手伝う子どもはテレビ視聴時間が短く、手伝わない子どもは長時間テレビを視聴している。手伝わないことで生まれた時間をテレビ視聴で費やしているのであろうか。

表 56　テレビ視聴×手伝いーー手伝う＝短視聴、手伝わない＝長視聴

	30 分以内	1 時間	小計	1 時間半	2 時間	2 時間半	3 時間以上	小計
手伝う群	19.4	21.3	40.7	13.9	17.6	8.3	19.4	27.7
中間群	7.8	13.4	21.2	14.4	20.2	10.5	33.7	44.2
手伝わない群	7.4	14.0	21.4	11.4	18.9	12.7	35.5	48.2
全体	10.2	15.6	25.8	14.4	18.5	9.4	31.8	40.2

＊＊＊　　p＜0.001

さらに、表 57 によれば、手伝いをしている子の中で「2 時間以上勉強する子」は 29.7%に達する。それに対し、中間群は長時間勉強する子は 25.0%、「手伝わない群」は 19.3%にとどまる。

表 56 と表 57 とを合わせて考えると、手伝うと生活習慣との間に、「手伝いをする子＝テレビの短時間視聴＋きちんと勉強する」、「手伝わない子＝テレビを長時間見る＋勉強をし

ない」という関係が成立っているのが分る。

表 57　勉強時間×手伝い――手伝う＝長時間勉強する、手伝わない＝勉強は短時間

	しない	30 分	小計	1 時間	1.5 時間	2 時間	2.5 時間以上	小計
手伝う群	3.7	18.1	21.8	29.8	18.6	14.4	15.3	29.7
中間群	5.8	22.2	28.0	30.0	17.1	9.1	15.9	25.0
手伝わない群	9.2	34.2	43.4	24.1	13.2	6.6	12.7	19.3
全体	6.2	24.8	31.0	29.1	15.8	9.2	14.9	24.1

＊　　p＜0.01　（P 値＝0.013）

このように「手伝う」子どもはテレビ視聴をコントロールでき、きちんと勉強をする生活習慣のしっかりとした子どもである。「手伝う子」のそうした属性は家庭以外の項目に関連を持つのであろうか。

学校についての結果を表 58 に掲げた。数字だけを単純に追うなら、「手伝う群」の 53.2%は「学校が楽しい」と感じているが、「手伝わない群」が学校を楽しいと思う割合は 32.9%である。もちろん、「手伝い」と「学校の楽しさ」はストレートに結びつくものではなく、説明のために媒介変数が必要であろう。手伝いをする子は生活習慣がしっかりし、親と信頼関係が結ばれている子どもである。そうした子どもは学校へ行っても、きちんと行動できるから、学校に適応し、学校が楽しいのであろう。

表 58　　学校が楽しい×手伝い――手伝う群=学校が楽しい――　　（%）

	全　体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差
①とても楽しい	42.5	53.2	41.8	32.9	20.3
②わりと楽しい	31.0	27.3	31.9	31.6	―
③少し楽しい	6.8	11.6	17.3	20.3	―
④あまり～全然楽しくない	9.8	7.9	9.1	15.1	―7.2

＊＊　p＜0.01　　（p 値＝0.001）

こうした延長線上に表 59 のような結果も得られている。これは、授業理解と手伝いとの関連をたしかめたものだが、統計的に有意義とはいえないものの、手伝いをしている子は算数の理解がよい傾向をうかがうことができる。

表 60 は学歴期待を示している。この結果も、統計的に有意とはいえないが、手伝う群の進学期待が高い傾向が感じられる。

表 59　　算数の理解×手伝い　　（%）

	全　体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差
①ほとんど分る	35.3	40.2	35.5	33.6	6.6
②大体分る	37.1	36.4	37.4	39.3	—
③半分くらい分る	16.3	12.6	17.7	16.6	—
④あまり～全然分らない	11.4	10.7	9.4	10.5	—

（p 値＝0.688）

表 60　　学歴期待×手伝い

ーー手伝う群は進学期待が高い傾向もーー　　（%）

	全　体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差
高校まで	25.9	25.3	22.9	27.5	
専門・短大	28.8	28.5	29.9	26.2	
普通の大学	27.7	26.2	28.9	30.6	
難関大学	17.5	20.1	18.4	15.7	4.4

（p 値＝0.171）

5）手伝う子の自己像

表 59 や表 60 は統計的に有意な差は認められなかったが、表 61 は顕著な有意さが見られた項目である。表中の数値が示すように、手伝っている子どもは「①好きな人と結婚できる」、「②良い父・母になれる」、「③幸せな家庭を作る」など、家庭的に明るい見通しを持っている。それに加え、「④つきたい仕事につける」、「⑤仕事面で成功する」など、職業面でも開かれた未来を予想している。さすがに、「⑥社会的に有名になれる」や「⑦お金持ちになれる」との関連はこれまでの項目程強くはないが、それにしても、手伝う群の子どもは未来に明るい見通しを抱いているのが分る。

表 61　　将来への見通しーー手伝う群は明るい見通しーー（%）

	全体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差	検定
①好きな人と結婚できる	12.2	15.6	12.4	6.1	9.5	＊＊＊
②良い父・母になれる	27.3	43.0	25.4	17.0	26.0	＊＊＊
③幸せな家庭を作る	37.3	54.7	32.7	25.3	29.4	＊＊＊
④つきたい仕事につける	33.8	40.5	32.4	29.1	11.4	＊＊＊
⑤仕事面で成功する	23.1	30.7	21.5	18.0	12.7	＊＊＊

⑥社会的に有名になれる	9.1	9.9	8.4	8.0	1.9	＊
⑦お金持ちになれる	12.7	12.6	11.2	14.0	—1.4	＊

4 回答選択肢中、「きっとできる」と思う割合

＊＊＊　p＜0.001、　＊　p＜0.01

これまでふれてきたように「手伝う子ども」は安定した家庭に支えられているだけでなく、本人の生活習慣がきちんとしており、親との関係もよく、そうした自信があるからなのか、将来に明るい希望を抱いている。

こうした考察が誇張でないことは、表 62 にも現れている。「手伝う群」の 40.2%は「自分を頑張るタイプ」と思っているのに、「手伝わない群」の中で、自分を頑張ると思える子は 20.5%で、「あまり」を含めると 42.8%が頑張るタイプとはいえないと感じている。

表 62　頑張る×手伝いーー手伝う群＝頑張るタイプーー　（%）

	全　体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差
①とてもそう	27.4	40.2	23.1	20.5	19.7
②わりとそう	38.0	33.6	41.7	36.7	—
③あまりそうでない	27.1	22.4	27.9	32.3	—
④全然そうでない	7.5	3.7	7.2	10.5	—

現在の子どもは自分に自信を失っているといわれる。自己像は他者、特に友からの評価で作られるといわれる。子どもたちは群れ遊ぶの体験もなく、家の中でテレビを見たり、ゲームをしたりして一人きりで放課後を過している。そうした子どもが友と競うのは勉強の成績であろうが、成績面での勝者はほんの一握りの子どもに限られている。そうなると、多くの子どもは自信を持てないままに成長していく。

表 63 によれば、「手伝う群」の子どもは「①友だちが多い」、「③優しい」タイプの「⑤正直」で、「⑥勇気がある」、「②頑張る」タイプという自己像を抱いている。それに対し、「全く手伝わない群」は自分を「友達が少なく」、「やさしさに欠け」、「正直といえない」「怠け者」タイプと思っている。自分に自信を持てない子どもである。

表 63　　自己評価×手伝いーー手伝う群=明るい自己像ーー（%）

	全体	手伝う群	中間群	手伝わない群	差	検　定
①友だちが多い	35.5	47.9	33.5	25.3	22.6	＊＊＊
②頑張る	27.4	40.2	23.1	20.5	19.7	＊＊＊

③優しい	21.9	32.2	16.9	18.7	13.5	＊＊＊
④スポーツが得意	21.4	28.8	19.9	15.7	13.1	＊＊＊
⑤正直	13.4	18.2	11.1	11.5	6.7	＊＊＊
⑥勇気がある	17.9	27.4	15.9	10.9	16.5	＊＊＊
⑦勉強が得意	13.8	17.4	13.4	11.4	6.0	＊

4 回答選択肢中、「きっとできる」と思う割合

こう見てくると、「手伝っている子」のイメージは安定した家庭の中で暮らし、生活習慣がきちんとし、家庭内や学校での人間関係もうまくいっている。当然、学校での居心地もよく、将来に明るい見通しを抱き、自己像も安定している子どもである。そうした子どもが家庭で自分から手伝っているのであろう。

この結果を短絡的にとらえれば、「手伝い」にすべてを好転させる特効薬という印象を受ける。手伝えば、生活習慣がきちんとなり、自己像も明るさを増し、開かれた未来を感じることができる。そうだとすれば、とにかく、子どもに手伝わせればよいことになる。

そうした一方、手伝うという行為はその子を示す氷山の一角という見方も成立つ。手伝った方がよいというのは分かっている。でも、好きなテレビがある。もっと、のんびりしていたい。動くのは面倒だ。ともあれ、手伝う気持ちになれない。分っているはいるけれど、手伝う気になれない。そうなると、「手伝って」という呼びかけても、その子が手伝う行為を始めるとは思えない。

もっとも、この問題は鶏が先か、卵が先かの論議に似てくる。きちんとした子が手伝うのであって、手伝ったから行動がきちんとするのではないという見方も成立つ。いずれにせよ、今回の調査を通して、手伝いという行為が子どもの姿を正確に投影していることが明らかになった。そうだとするなら、手伝っていない子どもの場合、とりあえず、形からという意味で、子どもに手伝わせてはどうか。手伝いを手がかりとして、きちんとした生活習慣を形成させる。その延長線に自己像を明るくさせる働きも見られる。そうした方向が今回の調査結果を生かす現実的な対応策のように思われてくる。

Ⅳ　「お手伝い」母親調査

サンプルの構成

本調査では、これまでふれてきたⅢの「お手伝い」子ども調査とは別に母親調査を実施した。なお、調査校は子ども調査と同じ学校なので、同じサンプルの親子ということになる。ただし、子ども調査は学校の自由時間を使って記入を求めたが、保護者調査は子どもを通して、調査票を封筒つきで保護者の家庭に持参してもらい、密封の上、学校に提出してもらう形をとった。調査票の冒頭に「お母さんにお答えいただくことをイメージして作成されています。しかし、お母さんがご都合の悪い場合は、どなたか別の方がご記入されても結構です」の文章を付した。しかし、記入者の内、母親は 886 名だった。以下の分析では、母親のデータのみを分析の対象とすることにした。

記入者　　1014 名中、母親 886 名（87.3%）　その他 37 名　不明９１名

そして、サンプル構成は以下の通りである。

地域	関東＝44.7	関西＝52.3
子ども	一人＝14.8	2 人以上＝85.2
家族の型	核家族＝83.0	拡大家族＝17.0

１　母親としての心情

１）　基本的な属性

Ⅲの「お手伝い」子ども調査では、子どもの手伝いは家庭の影響を受けていることが明らかだった。そこで、母親のサイドから、子どもの家庭を概観することにしたい。

表 1 は家族構成だが、子ども調査の表 4 の結果とほぼ一致した数値が得られている。といっても、同じサンプルなのであるから、数値がほぼ同じでも当然なのだが、祖母が同居している家庭が 14.0%、父親が不在な家庭が 13.6%である。

表１　家族構成（調査票持参の子どもから見て）　（%）

		父	母	兄	姉	弟	妹	祖父	祖母	他
全体		86.4	99.3	25.9	24.5	28.3	25.3	8.7	14.0	1.9
子ども調査		86.3	97.1	26.8	24.5	28.8	24.9	11.7	17.9	3.8
性別	男子	86.4	98.9	27.5	24.6	27.5	22.4	9.4	14.5	2.7
	女子	86.7	99.8	24.1	24.1	27.9	28.5	7.9	13.6	1.2
地域	関東	85.9	99.7	23.1	23.6	25.1	25.4	9.2	13.3	1.5
	関西	86.9	96.9	28.1	25.3	30.8	25.3	8.2	14.6	2.3

母親の職業も、子どもの表 5 に示した通りで、フルタイムが 22.5%で、専業主婦は 28.5%である。パートの 38.8%を含め、67.6%、つまり、母親の 3 分の 2 が、子ども中心の生活

を送っている計算になる。

表 2　　職業――フルタイムは 4 分の 1 弱　　（%）

		フルタイム	パートタイム	専業主婦	家業手伝い	その他
全　体		20.8	40.0	29.9	5.1	4.2
子ども調査		26.4	25.3	27.8	5.1	15.4
性別	男子	19.7	40.5	30.2	5.6	4.0
	女子	21.5	39.7	29.7	4.7	4.4
学年	4 年	20.6	36.5	31.4	6.3	5.1
	5 年	22.1	41.8	30.0	4.2	1.9
	6 年	19.5	42.7	28.7	4.8	4.4
地域	関東	28.5	35.5	25.4	5.9	4.6
	関西	14.5	43.6	33.4	4.5	3.9

子どもの調査にあたって、家庭の経済水準が大きな規定要因になることが多い。しかし、プライバシー保護の観点から、調査票にそうした項目を入れるのは避けたが、本調査では「生活のゆとり」というワーディングで、経済のレベルを尋ねてみた。「あまりゆとりがない」の 58.8%に「全く」の 12.0%を含めて、7 割に達する。なお、子どもの数については、表 4 のように、1 人っ子の家庭は 16.2%である。

表 3　経済水準――「ゆとりがある」が 3 割――（%）

		とても	かなり	小計	あまり	全く
全　体		3.0	26.2	29.2	58.8	12.0
子ども	一人	2.5	24.8	27.3	56.2	16.5
	2 人以上	3.1	26.4	29.5	59.2	11.3
仕事の有無	フル	1.8	31.8	33.6	53.5	12.9
	パート	1.3	18.8	20.1	67.1	12.8
	専業主婦	6.4	30.5	36.9	52.5	10.6

表 4　一人っ子家庭　　（%）

		一人っ子	2 人以上
全体		16.2	83.8
子ども調査		15.8	84.2
地域	関東	21.0	79.0
	関西	12.3	87.7

仕事	フルタイム	21.2	78.8
	パート	13.4	86.6
	専業主婦	15.8	84.2
生活	豊か	16.5	33.5
	あまり	15.5	34.5
	全く	21.6	78.4

女性対象の調査を実施する時、「女性として生まれ変われたら、どんな生き方をしたいか」は、女性にどう生きたいかという夢を語ってもらうことになる。それだけにジェンダーロールを知る有力な項目として知られる。表 5 によれば、専業主婦志望は 17.6%で、実際の専業主婦率 29.9%（表 2）より 12.3%も少ない。しかし、フルタイム志望も 17.8%で実際の 20.8%（表２）より 3.0%数値が低い。そして、パートと復帰型（子育てが終わったら仕事をする）は全体の 45.6%、これに、専業主婦志望を含めると、子育て派が 63.2%と、3 分の２に迫っている。フルタイムの仕事より、子育てを配慮した生き方をしたいという女性が多いのであろう。

表 5　　どんな生き方をしたいか　　(%)

		専業主婦	パート	復帰	主婦小計	両立	DINKS	シングル	その他
全体		17.6	28.7	16.9	63.2	17.8	0.6	3.8	14.8
地域	関東	15.3	24.6	13.7	53.6	23.8	0.5	3.1	18.9
	関西	19.5	32.1	19.5	71.1	12.8	0.7	4.3	11.1
家族	核	17.5	28.4	17.0	62.9	17.8	0.6	3.8	14.9
	2 世代	18.3	30.5	15.3	64.1	17.6	0.8	3.8	13.7
仕事	フル	10.5	24.4	8.7	43.6	33.1	0.6	5.2	17.4
	パート	13.3	33.1	22.5	68.9	15.4	0.6	2.7	12.4
	専業	30.2	27.4	16.1	73.7	10.9	0.4	4.0	10.9

設問文＝「女性としての人生をやり直せるとしたら、あなたはどんな生き方をしてみたいですか。」

それでは、主婦として、家族の世話をどう感じているのか。家族の世話が大変という回答は 51.5%に達するが、属性別に考察すると、①職業別では、フルタイム（68.3%）は専業主婦（38.9%）より世話が大変と答えている。そして、②経済的には「ゆとりのある方」（45.5%）より「苦しい方」（67.7%）が、③子どもについては、「一人っ子」（45.7%）より「2 人以上」（53.0%）が家族の世話は大変と答えている。この中では、やはり、フルタイムが家事が大変というのが目につく。

表 6　家族の世話の大変さ
――経済のゆとりがなく、フルタイムだと大変――　　(%)

		とても	かなり	大変小計	あまり	全く
全　体		9.7	41.8	51.5	45.3	3.2
地域	関東	10.3	44.5	54.8	41.9	3.3
	関西	9.3	39.5	48.8	47.9	3.3
子ども	ひとり	8.5	37.2	45.7	50.4	3.9
	2 人以上	10.1	42.9	53.0	43.9	3.1
家族	核家族	10.0	41.4	51.4	45.4	3.2
	2 世代	8.5	43.0	51.5	44.3	4.2
仕事の有無	フルタイム	14.4	53.9	68.3	27.8	3.9
	パート	9.8	42.0	51.8	47.1	1.1
	専業主婦	5.4	33.5	38.9	54.9	6.2
経済水準	まあゆとり	8.2	37.3	45.5	47.2	7.3
	あまり	10.2	42.6	52.8	45.7	1.5
	全く	15.6	52.1	67.7	30.2	2.1
生き方	専業主婦型	8.2	37.4	45.6	51.7	2.7
	パート型	8.7	39.0	47.7	49.4	2.9
	復帰型	5.0	46.0	51.0	46.1	2.9
	両立型	11.4	45.0	56.4	39.6	4.0

それでは、家族は母親の家事をどの程度協力しているのか。表 7 によれば、「協力的」は 48.3%で、「協力的でない」が 51.7%と、反応はほぼ半ばしている。そうした中で、①職業別ではフルタイム（60.4%）が専業主婦（42.5%）より、②経済的にゆとりのある方（58.5%）はゆとりがない方（37.5%）より、③子どもが 2 人以上（49..4%）が一人っ子（41.1%）より、家族が協力的だと答えている。

母親がフルタイムで働き、子どもが 2 人以上なら、家事が大変だから、家族が協力するのは当然であろう。逆にいうと、専業主婦の母親のもとに子どもが一人なら、家族の協力などはそれ程必要としないかもしれない。そうした中で、経済的に苦しい家庭なら、みんなで家事を協力すればよいのにと思うが、残念ながら、ゆとりのある家庭の方が家族の協力を得ている。この点は、経済的な貧しさは時間のなさに連なりやすいなど、多くの観点からの考察が必要であろう。しかし、そうした展開は本報告書の趣旨から外れるので、ここでは問題を提示するにとどめる。

表 7　家族の協力――フルタイムと専業主婦とで家族の型の違い――（%）

		とても	かなり	協力的小計	あまり	全く
全　体		12.5	35.8	48.3	46.5	5.2
地域	関東	11.8	37.5	49.3	44.5	6.2
	関西	13.1	34.4	47.5	48.1	4.4

子ども	ひとり	10.1	31.0	41.1	48.8	10.1
	2 人以上	12.8	36.6	49.4	46.2	4.4
家族	核家族	10.5	34.6	45.1	49.1	538
	2 世代	23.2	41.6	64.8	33.8	1.4
仕事の有無	フルタイム	22.5	38.0	60.5	35.7	3.8
	パート	8.7	38.8	47.5	47.9	4.6
	専業主婦	9.7	32.8	42.5	50.2	7.3
経済水準	まあゆとり	18.3	40.2	58.5	37.1	4.4
	あまり	10.7	35.3	46.0	49.1	4.9
	全く	9.4	28.1	37.5	53.1	9.4

2） 家事についての気持ち

これまで、一括りして、「家事」といってきたが、家事には子どもの世話の他に、料理、洗濯、掃除などがある。そこで、家事の中での好き嫌いを尋ねてみた。母親によれば、一番好きなのは「①子どもの世話」で、次いで、「②洗濯」や「③料理」は 7 割の母親が好きと答えている、それに対し、「④掃除」や「⑥夫の世話」は好きと嫌いが半ばしている。掃除は片付けても、すぐにまた散らかる。満足感を持ちにくい作業なのであろうか。

なお、表 9 によれば、2 世代家族の母親は家事が好きという傾向が見られる。また、表 10 では、専業主婦は料理を中心に家事が好きで、夫の世話を好きな傾向が見られるが、掃除が得意でないというのも興味深い。

表 8　好きな家事の種類――子ども＞洗濯＞料理――　(%)

	とても好き	わりと好き	好き小計	わりと嫌い	とても嫌い
①子どもの世話	19.0	71.7	90.7	9.2	0.1
②洗濯	15.5	67.5	83.0	16.0	1.0
③料理	10.4	62.0	72.4	24.8	2.8
④掃除	9.7	44.3	54.0	40.9	5.1
⑤親戚つきあい	3.1	48.7	51.8	38.3	9.9
⑥夫の世話	4.1	47.4	51.5	39.1	9.4

表 9　好きな家事の種類×属性――2 世代家族は家事が好き―　(%)

	子どもの数		家族の型	
	一人	2 人～	核家族	2 世代
①子どもの世話	93.8	90.2	90.1	93.5
②洗濯	80.9	83.5	81.9	88.6
③料理	69.8	73.0	71.2	80.0
④掃除	56.6	53.4	53.0	60.0
⑤親戚つきあい	54.7	51.1	49.8	62.2

⑥夫の世話	52.5	51.0	50.5	58.3
⑦6 項目の平均	68.1	67.0	66.1	73.8

「とても」＋「わりと」好きな割合

表 10　　好きな家事の種類×仕事の有無
——　専業主婦は家事がやや好き—　（%）

	フルタイム	パート	専業主婦
①子どもの世話	88.1	82.2	90.8
②洗濯	82.7	84.2	81.1
③料理	68.1	69.7	77.3
④掃除	56.9	54.0	51.3
⑤親戚つきあい	50.0	52.9	50.1
⑥夫の世話	45.7	48.4	58.3
⑦6 項目の平均	65.3	65.2	68.2

「とても」＋「わりと」好きな割合

家事と経済水準との関わりは表 11 に詳しい。全体としてみると、経済的にゆとりのある家庭の母親は家事が好きだが、子どもの世話は経済水準との関連は見られない。そうした中で、ゆとりのある母親は「料理」と「夫の世話」が好きと答える割合が多い。経済的なゆとりがあると、料理に費用をかけられるからであろうか。なお、表 12 によれば、専業主婦の生き方を肯定する母親は家事好きの傾向が得られている。

表 11　　好きな家事の種類×経済水準
——家事には豊かさが必要？—　（%）

	まあゆとり	あまり	まったく
①子どもの世話	90.6	89.4	89.4
②洗濯	84.2	81.1	82.4
③料理	79.9	69.2	61.4
④掃除	57.2	50.9	59.8
⑤親戚つきあい	56.9	51.6	40.0
⑥夫の世話	61.5	46.1	33.4
⑦6 項目の平均	66.7	64.7	61.1

「とても」＋「わりと」好きな割合

表 12　好きな家事の種類×生き方
——両立型は掃除が苦手？—　（%）

	専業主婦型	パート型	復帰型	両立型
①子どもの世話	92.8	92.9	93.4	87.0
②洗濯	82.4	86.4	84.2	81.0
③料理	76.3	67.1	80.8	65.2
④掃除	60.0	55.1	61.2	48.5
⑤親戚つきあい	54.9	58.7	54.3	50.0
⑥夫の世話	51.9	49.9	37.1	42.6
⑦６項目の平均	69.7	68.4	68.5	62.4

「とても」＋「わりと」好きな割合

ジェンダーロールに関連した項目として、「男性は家事よりも仕事」という捉え方に対する意見を尋ねてみた。賛否は半々だったが、母親がフルタイムと専業主婦かで意識に開きが見られる。フルタイムの母親は「男性＝仕事」に賛成が 35.9%と、批判的な声が多い。しかし、専業主婦の賛成は 57.0%と６割に迫っている。

フルタイムの仕事を持つ女性は性差の少ない社会を目指した生き方をしてきたから、男性＝仕事に批判的で当然であろう。それに対し、専業主婦は性差に対応した役割分業の生き方を送ってきた。それだけに性的な役割分業に肯定的なのであろう。

表 13　男性は家事よりも仕事――半々、２世代家族、　　(%)

		とても	わりと	思う小計	あまり	全く
全　体		11.0	38.9	49.9	42.1	8.0
地域	関東	12.8	34.9	47.7	43.5	8.9
	関西	9.5	42.0	51.5	41.3	7.2
子ども	ひとり	12.2	29.8	42.0	47.3	10.7
	2 人以上	10.7	40.3	51.0	41.5	7.5
家族	核家族	10.5	37.7	48.2	43.7	8.1
	2 世代	12.8	45.4	58.2	34.0	7.8
仕事の有無	フルタイム	8.3	27.6	35.9	50.8	13.3
	パート	11.5	40.2	51.7	40.8	7.5
	専業主婦	12.6	44.5	57.1	37.9	5.0
生き方	専業主婦型	20.3	35.1	55.4	37.8	6.8
	パート型	7.9	44.6	52.5	42.1	5.4
	復帰型	12.9	38.8	51.7	41.8	6.5
	フルタイム	8.3	27.6	35.9	50.8	13.3

子育てにあたって、「男は男らしく、女は女らしく」をどう考えるかも、ジェンダーロールに関連する設問だが、ここでも。「そう思う」が 56.0%、「思わない」が 44.0%で、意見は半々で、肯定派がやや多いという状況だった。

ジェンダーロールはその人その人の価値観に関連するから、どちらがよいとはいいにくい性質の問題である。そうした中で、「男は男らしく」の意見に専業主婦の 61.8%が賛成しているが、フルタイムの賛成は 46.1%にとどまる。

そう考えてくると、母親が専業主婦かフルタイムかは勤務形態だけの問題だけでなく、母親の意識にも関連しているのが分る。となると、子どもの手伝いにも母親の勤務形態は関連してくるのであろうか。

表 14　男は男らしく、女は女らしく

――　フルタイムと専業主婦とで意識に開きーー　　（%）

		とても	わりと思う小計	あまり	全く
全　体		14.1	42.0	56.1	38.0	5.9
地域	関東	12.5	41.8	54.3	39.6	6.1
	関西	15.4	42.1	57.5	36.8	5.7
子ども	ひとり	16.0	39.8	55.8	38.9	5.3
	2 人以上	13.6	42.3	55.9	38.1	6.0
家族	核家族	13.0	42.1	55.1	38.9	6.0
	2 世代	20.4	41.6	62.0	32.4	5.6
仕事の有無	フルタイム	12.6	33.5	46.1	42.4	11.5
	パート	12.6	43.6	56.2	38.7	5.2
	専業主婦	16.0	45.8	61.8	34.0	4.2
経済水準	まあゆとり	15.0	43.2	58.2	35.9	6.0
	あまり	13.0	44.3	57.3	38.0	4.7
	全く	24.7	29.9	54.6	36.1	9.3

外食に関する資料を表 15 に示した。ファミレスは各地に普及しているが、よく利用している家庭は 28.5%で、あまり利用していない家庭が多い。その中で、経済的にゆとりのある層（41.1%）やフルタイム（40.0%）の家庭がファミレスの利用が多い。家庭の背景を考えると納得のできる資料である。

表 15　外食の機会

――豊かさ＋フルタイム=外食――　　（%）

		とても多い	わりと多い小計	あまり	全く
全　体		3.7	24.8	28.5	56.1	15.4
地域	関東	4.1	26.8	30.9	53.5	15.6
	関西	3.3	23.2	26.5	58.3	15.2
子ども	ひとり	4.7	31.8	35.5	46.4	17.1
	2 人以上	3.4	23.5	26.9	57.9	15.2

家族	核家族	4.1	25.1	29.2	55.8	15.0
	2 世代	1.5	23.4	24.9	58.3	16.8
仕事の有無	フルタイム	5.0	35.0	40.0	47.2	12.8
	パート	3.2	19.2	22.4	60.2	17.4
	専業主婦	3.1	27.6	30.7	54.9	14.4
経済水準	まあゆとり	4.3	36.8	41.1	47.8	11.1
	あまり	3.0	20.8	23.8	59.9	16.3
	全く	4.1	17.5	21.9	51.5	26.8

3）子どもとの関係

これまで今回の調査の家庭的な背景を考察してきた。それでは、母親は子どもをどう感じているのか。

母親たちは子どもの「①人柄（83.5%）」や「②友だち関係（81.3%）」には満足している。しかし、「③勉強の成績」への満足は 61.8%にとどまる。そして、「⑤お手伝い」は、満足は 52.3%である。勉強の成績は得意不得意があるから、全部の子が親の期待に添えないとは思う。しかし、手伝いは親がいえばよいだけの問題のような気がする。しかし、言いたいけれど、いうのを我慢している母親が多いのであろうか。

表 16　子どもへの満足　（%）

	とても	かなり	満足小計	あまり	全く
①人柄	35.9	47.5	83.4	15.3	1.3
②友だち関係	26.4	54.9	81.3	18.5	0.2
③勉強の成績	17.1	44.8	61.9	33.9	4.2
④やる気	16.7	35.8	52.5	42.4	5.1
⑤お手伝い	13.9	38.4	52.3.	43.1	4.6

表 16 の「⑤お手伝い」の欄のように、母親の半数は子どもの手伝いに不満を抱いている。手伝いについては後にふれることにするが、ここでは、参考までに、手伝いに満足している母親を探ると表 17 のような数値になる。手伝いであるから、母親の就労と関連があると仮定していた。しかし、ほとんど差が見られなかった。それに対し、経済にゆとりのある家庭の母親の場合、子どもの手伝いに満足（63.9%）しているが、ゆとりがない家庭の場合、満足は 46.9%にとどまる。手伝いが家庭の経済水準にどうして関連するのか。「手伝い」というのは、ゆとりのある家庭という条件に支えられているのであろうか。

表 17　手伝いへの満足×属性　（%）

――― 経済レベルと関連する一一

	とても	かなり	満足・計	あまり	全く

仕事	フルタイム	11.1	42.2	53.3	41.1	5.6
	パート	13.3	36.6	49.9	45.2	4.9
	専業主婦	16.7	37.2	53.9	41.4	4.7
経済	ゆとりあり	16.3	47.6	63.9	32.2	3.9
	あまりない	12.6	35.4	48.0	47.5	4.5
	全くない	14.6	32.3	46.9	42.7	10.4
全体		13.9	38.4	53.3	43.1	4.6

親の学歴期待は表１８の通りで、「海外大学（3.9%）」と「難関大学（14.9%）」を加えた難関大希望は 18.8%で、これに、「大学」の 48.4%を含めると、大学進学期待は 67.2%に達する。そうした中で、「一人っ子」（29.1%）、「フルタイム」（27.8%）、「ゆとりがある」（25.0%）などの属性が加わると、難関大学進学への期待が高まる。

表 18　学歴期待

--一人っ子・核家族・フルタイム・豊かさは学歴期待――　　（%）

		高校	短大	専門	大学	難関大	海外留学	難関小計
全　体		13.2	6.6	13.0	48.4	14.9	3.9	18.8
地域	関東	9.8	4.5	10.6	51.5	18.2	5.5	23.7
	関西	16.2	8.3	15.1	45.8	12.1	2.5	14.6
子ども	ひとり	8.3	2.5	15.8	44.2	23.3	5.8	29.1
	2 人以上	13.7	7.4	12.4	49.4	13.6	3.6	17.2
家族	核家族	13.4	6.4	12.6	47.9	15.2	4.4	19.6
	2 世代	12.2	7.6	13.7	51.9	13.0	1.5	14.5
仕事の有無	フルタイム	12.7	4.0	9.8	45.7	21.4	6.4	27.8
	パート	14.3	7.3	13.1	50.9	11.6	2.7	14.3
	専業主婦	10.8	7.9	14.2	50.4	13.3	3.3	16.6
経済水準	まあゆとり	7.0	4.8	8.8	54.4	21.1	3.9	25.0
	あまり	14.2	7.2	14.6	47.1	13.1	3.8	16.9
	全く	27.5	6.6	17.6	36.3	6.6	5.5	12.1

今回の調査にあたって、多くの母親にヒヤリングを行った、その際、手伝いもさせたいけれど、学習塾通いが忙しいし。宿題や予習もあるので、「手伝いなさい」といいにくいという声を聞いた。

そこで、「手伝いより勉強をして欲しい」と思うかどうかを尋ねてみた。「手伝いより、勉強して欲しい」と思う母親は 31.3%で、「そうは思わない」が 68.7%に達する。手伝いを大事にしたいと思う母親が多いのであろうか（表 19）。

この結果は母親の素直な気持ちをあらわしたのか、それとも、表面的に取り繕った回答なのか疑問が残るが、この結果を信じるなら、多くの母親は手伝いを大事にすると答えている。

表 19　手伝いより勉強をして欲しいーー
――一人っ子、東京、専業主婦――（%）

		とても	わりと	勉強小計	あまり	全く
全　体		5.0	26.3	31.3	62.4	6.3
地域	関東	5.6	28.8	34.4	59.2	6.4
	関西	4.6	24.2	28.8	65.0	6.2
子ども	ひとり	8.6	28.1	36.7	55.5	7.8
	2 人以上	4.4	26.2	30.6	63.3	6.1
家族	核家族	5.1	26.6	31.7	62.0	6.3
	2 世代	5.0	26.4	31.4	62.2	6.4
仕事の有無	フルタイム	3.9	22.7	26.6	66.2	7.2
	パート	4.0	28.4	32.4	61.3	6.3
	専業主婦	6.3	28.1	34.4	59.3	6.3
経済水準	まあゆとり	4.3	26.1	30.4	62.3	7.3
	あまり	5.5	26.8	32.3	62.2	5.5
	全く	5.3	26.6	31.9	61.7	6.4

設問文＝「お子さんの年齢なら、お手伝いをするより、もう少し勉強して欲しいとお思いですか」

2　お手伝いへの気持ち

1）決まっている手伝い

これまで、母親の生活や子どもへの期待などを考察してきた。ここからは、子どもの手伝いについての母親のデータを紹介したい。

表 20 は母親が子どもの頃、手伝いをしたことがあるかを尋ねた結果を示している。「手伝った」は「かなり」の 33.3%を含めて、48.4%と半数にとどまる。母親たちは手伝っていない世代の育ちなのであろう。

表 20　　手伝いをしていたか　　(%)

		とても	かなり	小計	あまり	全く
全　体		15.1	33.3	48.4	46.5	5.1
就労	フルタイム	17.6	36.8	54.4	41.2	4.4
	パート	14.3	30.7	45.0	50.4	4.6
	専業主婦	13.1	33.8	46.9	46.2	6.9
意識	専業主婦	14.9	27.7	42.6	51.3	6.1
	パート	11.6	30.3	41.9	54.8	3.3
	復帰	13.2	39.8	53.0	37.1	4.9
	フルタイム	9.3	40.4	49.7	42.7	6.6

子どもの手伝いについての気持ちは表 21 の通りで、「手伝ってくれると助かる」が「わりと」を含めると 91.4%に達する。それと同時に、「子どもとの家事は楽しい」は 82.0%である。なお、「しつけのために手伝わせている」は 54.6%だった。

表 21　手伝いへの気持ち　　(%)

	とても	わりと	小計	あまり	全然
手伝ってくれると助かる	49.5	41.9	91.4	8.5	0.1
子どもとの家事は楽しい	28.8	53.3	82.1	16.8	1.1
子どもは喜んで手伝っている	15.6	46.3	61.9	34.6	3.5
しつけのために手伝わせている	10.5	44.1	54.6	37.6	7.8

「手伝ってくれると助かる」と「手伝いとの家事は楽しい」とは意味が異なる。「手伝ってもらい助かる手伝い」と「手伝ってもらう必要がないが、楽しい手伝い」、さらに「しつけるための手伝い」と、手伝いを支える考え方に幅が認められる。そこで、それぞれの項目について、属性分析の結果を紹介すると表 22 の通りで、フルタイムの母親が「手伝いが助かるし、楽しい」と思っているのが分かる。

表 22　手伝いの気持ち×属性

	全体	仕事の有無			経済水準		
		フルタイム	パート	専業主婦	ゆとり	あまり	まったく
手伝いは助かる	91.4	93.9	91.8	88.9	89.0	92.8	90.6
子との手伝い楽しい	81.0	84.6	83.9	75.6	85.1	78.9	86.5
てつだいはしつけ	54.6	46.7	58.3	53.3	58.1	52.4	54.7

「とても」＋「わりと」思う割合

それでは、子どもはどんな手伝いをしているのか。「いつも決まってしている手伝い」を聞くと、表 23 のような項目があがってくる。ここでは、「している割合」が 4%以上の項目にとどめたが、「している手伝い」の「①食器を運ぶ」や「③茶碗を並べ」は納得できるが、決まっていている家事の 2 位が「②風呂掃除」というのは興味深い。

それと同時に、「①食器を運ぶ」や「③茶碗を並べる」、「⑥食卓をふく」などを子どもが手伝っている家庭が専業主婦に多いのが目につく。専業主婦の母親がしつけとして、手伝いをさせているのであろうか。

表 23　　いつもしている手伝いーー４%以上の項目

――「食器を運ぶ」と「風呂掃除」、日常の家事＝専業、たたむ＝フルタイム――（%）

	全体	仕事の有無			子どもの数		家族の型	
		フルタイム	パート	専業主婦	一人	2 人以上	核家族	2 世代
①食器を運ぶ	32.5	19.1	33.2	43.4	32.9	32.8	33.0	30.1
②風呂掃除	23.2	21.8	24.8	23.4	16.4	24.5	24.8	15.1
③茶碗を並べる	19.1	10.0	21.5	22.1	15.1	19.7	19.8	15.1
④洗濯物たたむ	11.4	17.2	9.3	9.7	17.8	10.1	12.5	4.1
⑤ごみを出す	7.2	10.9	6.5	4.8	13.7	5.7	6.8	6.8
⑥食卓をふく	6.4	1.8	7.1	10.3	5.5	6.4	6.8	4.1
⑦みんなの部屋の掃除	4.4	5.7	4.5	6.5	4.1	4.6	4.5	4.1
⑧食器を洗う	4.3	5.5	4.2	3.4	1.4	4.8	4.1	6.7

なお、「決まった手伝いを始めた年齢」は表 24 のように小学低学年からが 43.4%で、全体の半数に近い。

表 24　決まった手伝いを始めた年齢　　（%）

	全体	仕事の有無			子どもの数	
		フルタイム	パート	専業主婦	一人	2 人以上
入学前	22.4	21.1	20.6	23.9	16.6	23.8
小学 1.2 年	44.5	47.1	44.7	41.5	50.0	43.2
小学 3.4 年	25.5	26.0	28.4	25.4	20.8	26.1
小学 5.6 年	11.4	11.5	10.1	12.7	15.3	10.9
その他	1.0	0.0	1.4	0.7	0.0	1.2

2）　何を手伝っているか

それでは、母親は、子どもがどの程度手伝っていると思っているのか。これまで、子ども調査でも使った 18 項目について、母親の評価を求めてみた（表 25）。母親によれば、手伝っている割合が 5 割を超えたのは。「①食後、食器を運ぶ」の 76.9%、「②茶碗や箸を並べる」の 54.7%の 2 項目に限られている。3 位の「③ご飯をよそう」をしているは 37.7%にとどまる。

表 25　子どもの手伝い
ーー箸を並べ、食後に食器を運ぶーー　　（%）

	毎日	週 3	小計	週 1	月 2	1.2 回	0 回
①食後、食器を運ぶ	61.6	15.3	76.9	7.8	9.1	4.8	1.5
②茶碗や箸を並べる	31.4	23.3	54.7	21.7	13.5	8.2	2.1
③ご飯をよそう	20.2	17.5	37.7	22.2	21.3	13.8	4.9
④テーブルを拭く	17.2	15.8	33.0	21.4	18.3	17.5	9.7
⑤玄関の靴を揃える	16.8	11.7	28.5	15.9	24.7	21.3	9.7
⑥洗濯物をしまう	13.2	10.7	23.9	13.5	19.8	26.2	16.6
⑦お風呂の掃除	6.4	8.9	15.3	11.7	26.2	31.7	14.2
⑧自分の机回りの掃除	7.1	7.2	14.3	23.2	41.5	16.6	4.5
⑨朝、新聞を取る	4.9	7.9	12.8	12.0	20.3	23.3	31.4
⑩洗濯物をたたむ	5.1	6.4	11.5	13.9	31.6	33.1	10.0
⑪ごみを出す	3.2	7.0	10.2	14.1	25.6	25.9	24.2
⑫食器を洗う	3.1	4.0	7.1	11.1	31.3	39.0	11.5
⑬簡単な料理を作る	2.6	3.8	6.4	15.6	32.8	35.7	9.5
⑭近所に回覧板を回す	4.2	2.2	6.4	5.3	23.5	24.6	40.2

⑮皆で使う部屋の掃除	2.0	3.7	5.7	13.4	34.6	33.5	12.9
⑯食器を拭く	3.1	2.4	5.5	6.2	17.2	32.7	38.4
⑰洗濯物を干す	1.5	2.3	3.8	6.1	14.4	41.8	33.9
⑱トイレ掃除	0.7	0.5	1.2	2.5	8.7	27.6	60.1

このように見てくると、子どもがいうほど手伝いをしていない印象をうけるが、母親の評価と子どもの申告とのずれを確かめると表 26 のような結果となる。「①食後、食器を運ぶ」を例にとると、子どもも一番していると思っているし、母親もそう評価している。しかし、「していると思う」割合は、子どもが 81.3%なのに対し、母親からの評価は 76.9%にとどまる。また、「②茶碗や箸を並べる」も順位は変らないが、「している」に対する評価は子どもが 68.4%で、母親が 54.7%で、母親が 13.7%低く評価している。

１８項目のすべてにわたって、子どもの手伝いに対する母親の評価は子どもよりきびしく、平均して 13.7%低い。したがって、「している手伝い」に対する順位は母と子とでほぼ一致しているが、母親は、子どもが言うほど手伝っていないと評価していることが分る。

表 26　手伝いについての親子のずれ

ーー順位はほぼ同じだが、子どもが言うほど、手伝っていないーー　　(%)

	親			子ども				差
	毎日	週 3	小計	順位	毎日	週 3	小計	
①食後、食器を運ぶ	61.6	15.3	76.9	①	68.0	13.3	81.3	― 4.4
②茶碗や箸を並べる	31.4	23.3	54.7	②	46.7	21.7	68.4	―13.7
③ご飯をよそう	20.2	17.5	37.7	③	33.8	24.9	58.7	―21.0
④テーブルを拭く	17.2	15.８	33.0	④	30.9	21.7	52.6	―19.6
⑤玄関の靴を揃える	16.8	11.7	28.5	⑥	19.9	16.8	36.7	― 8.2
⑥洗濯物をしまう	13.2	10.7	23.9	⑤	20.5	17.0	37.5	―13.6
⑦お風呂の掃除	6.4	8.9	15.3	⑨	14.7	15.0	29.7	―14.4
⑧自分の机回りの掃除	7.1	7.2	14.3	⑦	19.3	15.3	34.6	―20.3
⑨朝、新聞を取る	4.9	7.9	12.8	⑪	11.3	10.7	22.0	― 9.2
⑩洗濯物をたたむ	5.1	6.4	11.5	⑧	13.7	17.1	30.8	―19.3
⑪ごみを出す	3.2	7.0	10.2	⑩	11.2	14.0	25.2	―15.0
⑫食器を洗う	3.1	4.0	7.1	⑭	7.8	12.9	20.7	―13.6
⑬簡単な料理を作る	2.6	3.8	6.4	⑫	9.7	11.9	21.6	―15.2
⑭近所に回覧板を回す	4.2	2.2	6.4	⑮	9.5	8.1	17.6	―11.2
⑮みんなの部屋の掃除	2.0	3.7	5.7	⑫	9.9	11.9	21.8	―16.1

⑯食器を拭く	3.1	2.4	5.5	⑯	7.7	9.2	16.9	—11.4
⑰洗濯物を干す	1.5	2.3	3.8	⑰	6.3	10.2	16.5	—12.7
⑱トイレ掃除	0.7	0.5	1.2	⑱	3.3	5.0	8.3	— 7.1
18 項目の平均	——	——	19.7		——	——	33.4	—13.7

差＝親の評価―子の評価＝プラスは子どもが思うほどにはしていない

子どもの手伝いについて、母親の属性と関連させた結果が表 27 である。この表の下欄を参照すると、「フルタイム」の子の手伝いは 18 項目の平均で 21.5%、これに対し、「専業主婦」のこの手伝いは 19.0%で、3.5%の開きにとどまるが、フルタイムの母親を持つ子の方が手伝っている傾向が得られている。また、拡大家族の下で育つ子どもは人手が多いためか、手伝う割合が少ないように思われる。

表 27　子どもの手伝い×属性

――フルタイム・核家族=手伝うーーー　　(%)

	就労の形			家族の型		経済水準		
	フルタイム	パート	専業主婦	核家族	2 世代家族	ゆとり	あまり	全く
①食後、食器を運ぶ	79.0	75.5	77.7	77.8	72.5	76.9	76.2	70.5
②茶碗や箸を並べる	57.8	52.9	54.6	56.9	43.6	59.4	52.2	47.4
③ご飯をよそう	40.0	38.6	32.8	37.7	38.3	38.1	37.8	38.6
④テーブルを拭く	29.6	35.6	33.2	34.0	26.6	33.5	32.4	31.3
⑤玄関の靴を揃える	27.1	27.8	32.3	29.7	22.7	33.0	25.6	23.7
⑥洗濯物をしまう	31.3	21.4	21.1	24.9	18.4	22.8	20.9	28.1
⑦お風呂の掃除	16.5	16.2	13.8	15.9	12.1	19.2	14.2	13.6
⑧自分の机回りの掃除	15.1	11.7	16.9	14.6	11.2	17.1	11.7	12.5
⑨朝、新聞を取る	12.6	11.7	12.6	14.5	5.2	15.1	11.2	14.9
⑩洗濯物をたたむ	19.2	10.6	8.0	12.8	4.9	11.1	10.2	14.4
⑪ごみを出す	9.6	10.3	9.6	11.7	2.8	6.0	10.3	13.6
⑫食器を洗う	14.5	6.3	4.6	6.8	7.9	6.9	6.9	8.4
⑬簡単な料理を作る	9.4	6.9	5.4	5.8	9.1	7.0	5.7	5.7
⑭近所に回覧板を回す	5.4	6.9	6.4	6.7	4.3	7.1	4.2	13.6
⑮皆で使う部屋の掃除	7.2	4.0	7.0	5.7	5.7	5.6	5.1	6.4
⑯食器を拭く	3.8	5.2	4.1	5.3	6.5	5.2	4.1	12.5
⑰洗濯物を干す	7.8	3.5	1.5	3.8	3.6	3.4	3.7	3.1

⑱トイレ掃除	1.1	1.5	0.8	1.3	0.0	1.8	0.8	2.1
18 項目の平均	21.5	19.3	19.0	20.3	16.4	20.5	18.5	20.0

「毎日」＋「週３回位」の割合

３）　手伝いへの気持ち

子どもは母親が思うほどには手伝ってくれない。そうだろうと思う反面、母親が子どもの手伝いをどう考えているかを知りたくなる。

母親が子どもに「手伝って欲しい」のはどんな時なのか。表 28 によれば、「①掃除をする時」がもっとも高く、86.2%である。先に紹介した表 8 によると、母親の好きな家事の順位は「①子どもの世話」に次いで、「②洗濯」、「③料理」で、「④掃除」は嫌いが半数に迫った。おっくうな掃除は子どもにも手伝って欲しいのであろうか。

表 28　子どもに手伝って欲しい時―

―掃除の手伝いをして欲しい――　（%）

	ぜひ	できたら	小計	あまり	全く
①掃除をする時	30.8	55.6	86.4	11.9	1.7
②買い物の時	22.5	50.9	73.4	22.7	3.9
③夕食を作る時	16.0	56.7	72.7	22.2	5.1
④洗濯をする時	14.1	43.6	57.7	34.9	7.4
⑤朝食を作る時	7.5	31.0	38.5	47.3	14.2

なお、手伝って欲しい母親の属性をたしかめると、表 29 のような数値になる。「手伝った欲しい時」の５項目の平均が、「フルタイム」66.9%、「パート」62.9%、「専業主婦」５３．９%のように仕事を持つ母親は子どもの手助けを望んでいる。その他の属性をふまえると、「フルタイム」、「核家族」、「経済的なゆとりのなさ」の母親が子どもの手伝いを望んでいる。しかし、これまでの考察では、母親が望むように子どもは手伝っていない印象を受ける。

表 29　子どもに手伝って欲しい時×属性

――フルタイム＞パート＞専業主婦――（%）

	就労の形			家族の型		経済水準		
	フルタイム	パート	専業主婦	核家族	２世代家族	ゆとり	あまり	全く
①掃除をする時	68.0	62.5	49.4	58.5	52.5	51.9	60.5	60.4

②買い物の時	80.1	73.6	67.8	73.8	70.9	74.9	73.8	77.1
③夕食を作る時	76.1	75.5	68.2	73.2	71.4	68.9	64.9	74.7
④洗濯をする時	68.0	62.5	49.4	58.5	52.5	51.9	60.5	60.4
⑤朝食を作る時	42.5	40.3	34.8	38.0	41.8	35.8	39.4	47.9
5 項目の平均	66.9	62.9	53.9	60.4	57.8	56.7	59.8	64.1

「ぜひ」「できたら」の割合

何歳の頃までに「手伝いができるようにしたいか」についての結果を表 30 に示した。表から明らかなように、「①食器を洗う」や「②お風呂の掃除」は小学生までにしつけたいが、「⑮アイロンをかける」や「⑯夕食を作る」など難しい手伝い中学卒までにしつけたいという。そうした中で、１６項目中の 14 の項目について、「小学校高学年までにしつける」が 4 割に達する。手伝いは小学生の内にしつけたいことがらなのであろう。

表 30　何歳頃までに、できるようにしたいか

ー手伝いの基本的なしつけは小学卒業の頃までにーー　　(%)

	低学年	中学年	高学年	小計	中卒まで	高卒まで	成人まで	予定なし
①食器を洗う	13.3	28.5	40.3	82.1	130	2.4	1.7	0.8
②お風呂の掃除	19.5	25.3	35.1	79.9	13.1	3.2	2.2	1.6
③お茶を入れる	14.2	25.3	40.5	80.0	14.3	3.3	1.0	1.4
④缶きりで缶を開ける	11.1	23.7	44.6	79.4	15.7	2.5	1.1	1.3
⑤洗濯物をたたむ	19.8	21.9	34.7	76.4	15.9	3.9	2.5	1.3
⑥じゃが芋の皮をむく	11.0	19.9	43.4	74.3	19.0	3.4	2.4	0.9
⑦目玉焼きをつくる	6.4	19.6	46.2	72.2	20.3	4.4	2.2	0.9
⑧りんごの皮をむく	8.1	16.1	45.4	69.6	22.8	4.0	2.3	1.3
⑨家の掃除	11.2	16.1	38.8	66.1	26.3	4.4	2.6	0.6
⑩トイレの掃除	6.4	14.9	36.2	57.5	26.6	5.7	5.9	3.3
⑪洗濯物を干す	5.7	14.9	34.8	55.4	31.2	6.4	4.7	2.3
⑫味噌汁をつくる	2.6	9.7	40.1	52.4	33.9	7.0	5.4	1.3
⑬ボタンをつける	1.1	3.8	42.0	46.9	38.7	7.8	4.3	2.3
⑭夕食の買い物	3.2	10.2	26.7	40.1	37.0	11.5	8.1	3.3
⑮アイロンをかける	1.9	4.9	25.9	32.7	40.6	14.1	8.8	3.8
⑯夕食を作る	1.3	3.9	15.6	20.8	42.0	22.2	13.0	2.0

それでは、母親は子どもの手伝いをどう感じているのか。手伝いの効用については、「①

よく気がつく人になる」や「②思いやりのある人になる」が 9 割、「③幸せな家庭を作れる」が 8 割で、手伝いの効用を高く評価していることがわかる。

なお、属性別の結果では大きな差は見られないが、専業主婦が手伝いの効用を低く見積もっている点が興味深い。

表 31　お手伝いの効用――思いやりのある人になれる――　　(%)

	とても	わり と	(小計)	あまり	全然
①よく気がつく人に	41.3	52.8	94.1	5.3	0.6
②思いやりのある人に	39.4	52.1	91.5	8.0	0.5
③幸せな家庭を作れる	33.6	50.0	83.6	15.3	1.1
④勉強に役立つ	6.2	29.8	36.0	58.8	5.2

表 32　お手伝いの効用×属性

―――専業主婦は低く評価―――　　(%)

	就労の形			家族の型		経済水準		
	フルタイム	パート	専業主婦	核家族	2 世代家族	ゆとり	あまり	全く
①幸せな家庭を作れる	31.5	35.9	31.4	32.4	39.3	37.9	31.0	35.8
②思いやりのある人に	39.6	41.7	36.0	38.7	42.3	44.3	37.6	38.9
③よく気がつく人に	39.5	48.1	37.4	40.2	45.8	48.1	37.4	44.2
④勉強に役立つ	7.2	7.4	3.5	6.1	7.0	8.5	4.9	9.5
4 項目の平均	29.5	33.3	27.1	29.4	33.6	34.7	27.7	32.1

「とても思う」割合

手伝いの効用については子ども調査でも実施しているので、母子間のずれを確認すると表 33 のような数値となる。①勉強に役立つとは思わないが、②全体として手伝いの効用を高く評価している点は共通している。ただ、「③よく気がつく人になる」や「②思いやりのある人になれる」が母親の方が効用を信じているのが興味深い。そうした中で、勉強との関連を子どもが高く評価しているのが興味深い。

このように母親は手伝いの意味を高く評価しているが、その割りに、子どもが手伝っていない印象を受ける。

表 33　お手伝いの効用―子どもと母との比較―

――親子とも勉強には関係ない――　　(%)

	母			子ども			差
	とても	わりと	（小計）	とても	わりと	（小計）	
①幸せな家庭を作れる	41.3	52.8	94.1	52.2	31.6	83.8	10.3
②思いやりのある人に	39.4	52.2	91.6	50.1	31.1	81.2	10.4
③よく気がつく人に	33.6	49.9	83.5	43.8	37.1	80.9	2.6
④勉強に役立つ	6.2	29.8	36.0	11.9	31.8	43.7	― 7.7

差は「母親」－「子ども」の数値